

第1章 盛岡市の歴史的風致形成の背景

1 自然的環境

(1) 位置

盛岡市は、岩手県の中央部北寄りに位置する岩手県の県庁所在地である。市域は東西45.6キロメートル、南北40.7キロメートル、面積は886.47平方キロメートルで、市域の東側は宮古市・岩泉町、西側は雫石町・滝沢市、南側は矢巾町・紫波町・花巻市、北側は八幡平市・岩手町・葛巻町と接している。

市庁舎の位置は東経141度09分15秒、北緯39度42分07秒で、市の中心部付近は、北上盆地を貫流する流路延長、流域面積ともに東北地方最大の河川である北上川と、奥羽山脈を水源とする雫石川、北上高地を水源とする中津川等が合流するほか、岩手山等の象徴的な山並みを中心市街地から見る事ができる、豊かな水と緑に囲まれた都市である。

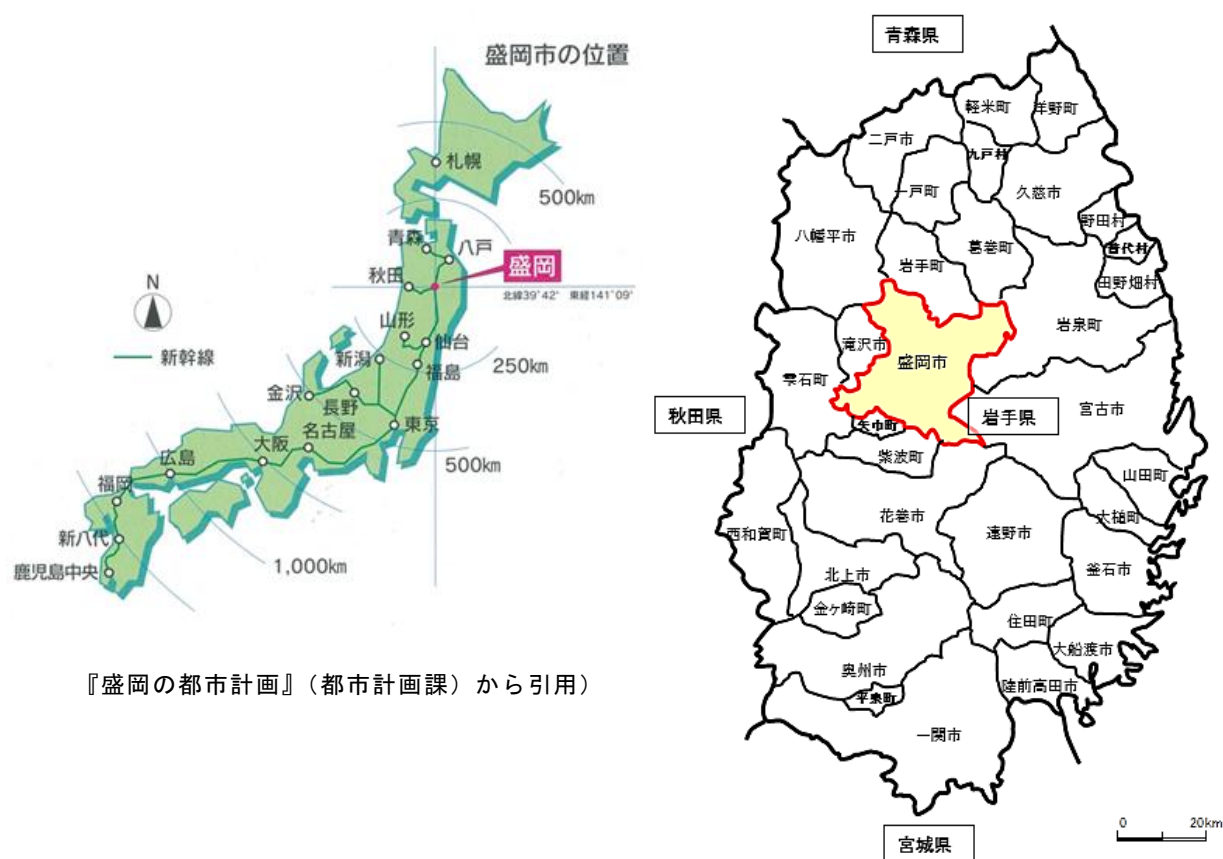


図 盛岡市の位置



盛岡市と岩手山（南から）



中心市街地とその周辺（北から）

株式会社タックエンジニアリング提供



中心市街地（北から）



中心市街地（南から）

(2) 地勢

盛岡市の地形は、北部と東部が山地及び丘陵地となっており、平地が南に開け、雫石川、中津川等の河川が中心市街地付近で北上川に合流している。

市域の北西部は、岩手山の噴火により形成された火山性の山地と丘陵地が広がっている。また、北部から東部にかけては北上高地に連なる小起伏山地、中起伏山地が広がるほか、南西部には山地と火山性の扇状地が見られる。

一方、市街地とその南側については、北上川、雫石川、中津川等の河川が運んできた砂礫によって形成された扇状地性の低地や、砂礫^{されき}台地及び河岸段丘上に立地している。

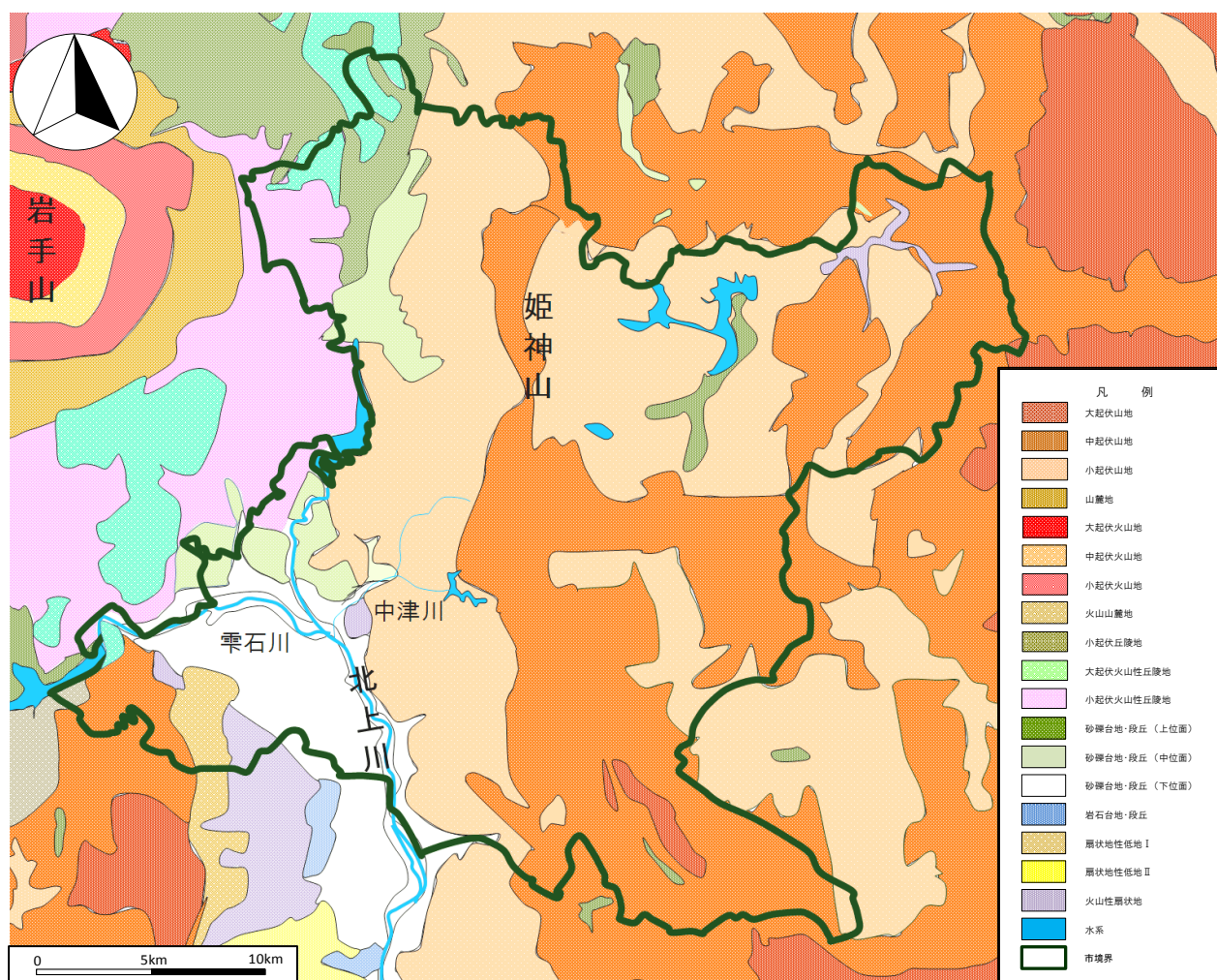


図 盛岡市の地形分類

この地図は、国土調査による 1/200,000 土地分類基本調査（地形分類図）「岩手県」岩手県（1974）を使用し、盛岡市が編集したものである。

(3) 河川

盛岡市における主な河川は、市の中心部を南北に流れる北上川に、北上山系の水を集めた中津川、^{たんとうがわ} 築川、^{おおさわがわ} 丹藤川、大沢川のほか、奥羽山系に源を発する^{まつかわ} 雫石川、^{とくさ} 松川、^{がわ} 木賊川、^{みなみかわ} 南川、^{みるまえがわ} 見前川などが合流する。

また、市街地の周辺では、北上川の支流である^{もろくずがわ} 雫石川に^{こもろくずがわ} 諸葛川、^{あらかわ} 小諸葛川、荒川などが、中津川には^{ねだもがわ} 米内川、築川には根田茂川が合流している。

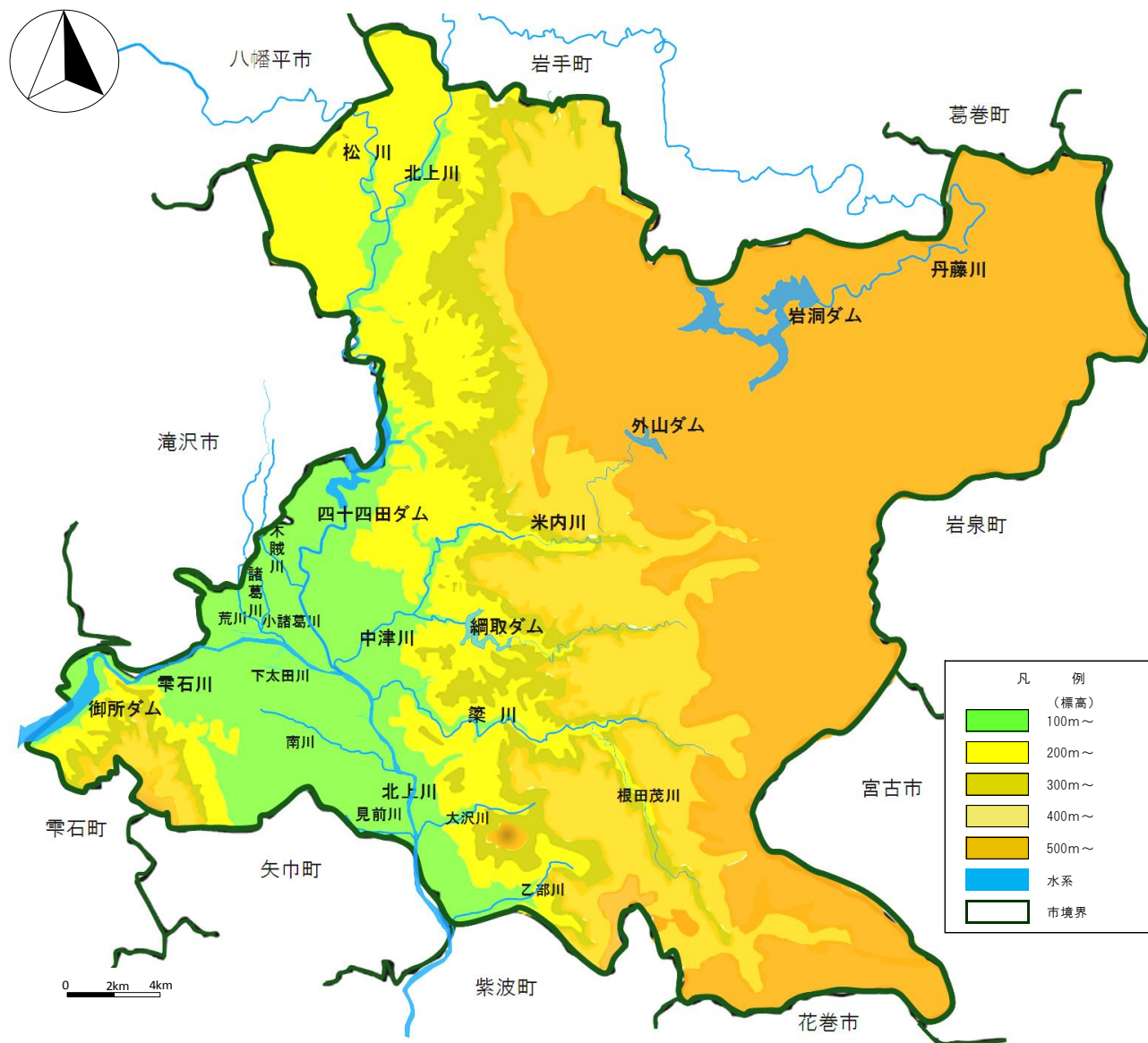
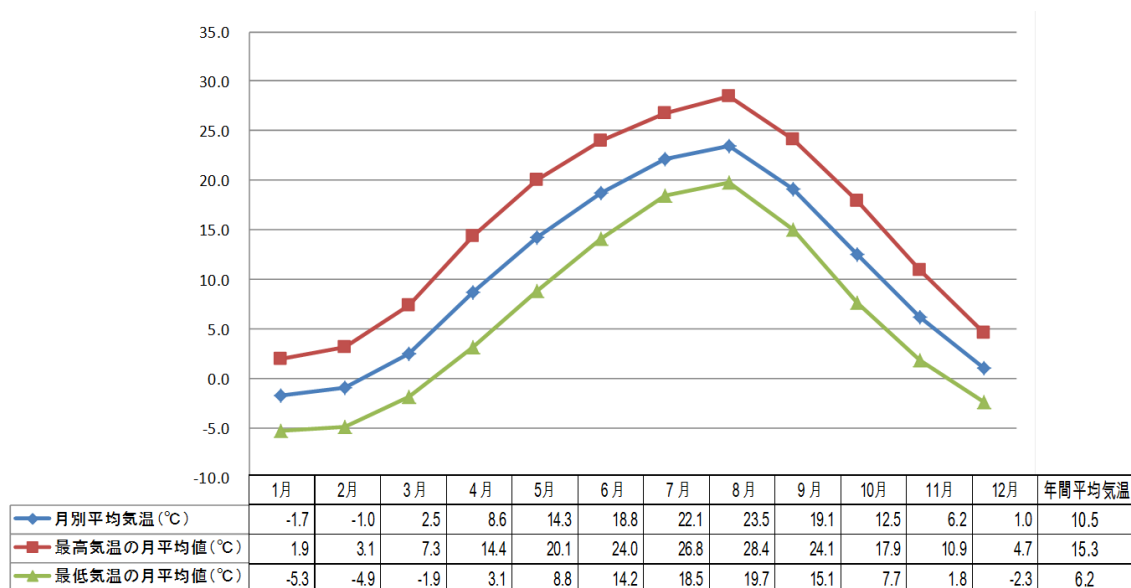


図 主な河川の分布

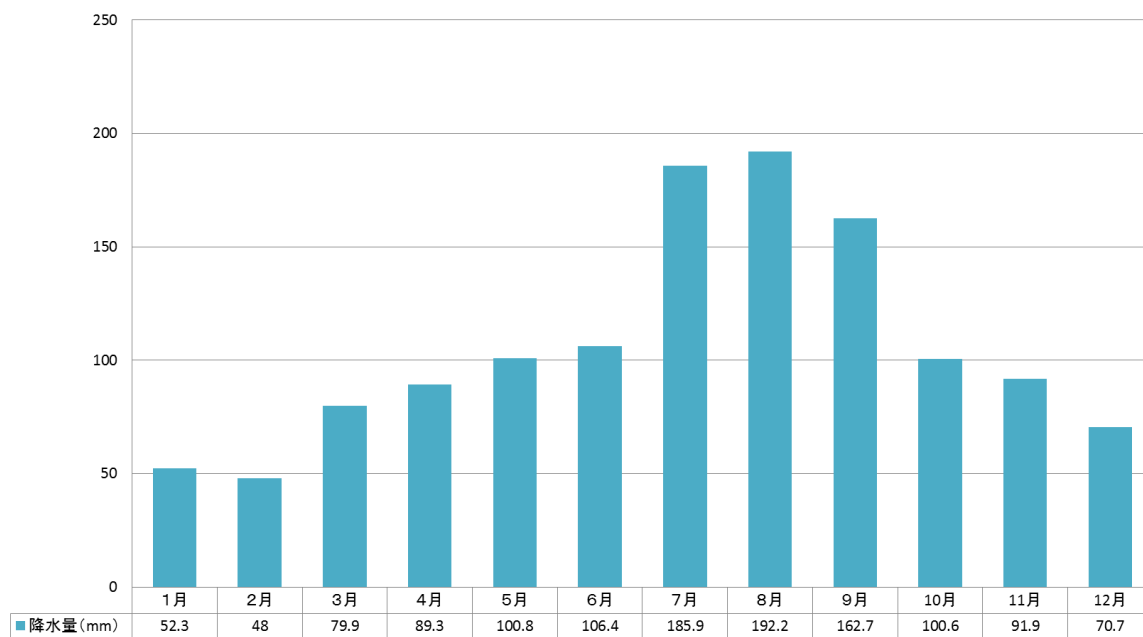
(4) 気候

盛岡市の気候は、寒暖差の大きい内陸性の気候であり、昭和62年（1987）から平成28年（2016）までの30年間における平均気温は摂氏10.5度で、最高気温は摂氏36.4度、最低気温氷点下14.6度とその差が40度以上に及んでいる。年間の平均総降水量は1,280.8ミリメートルで、平均積雪日数は101日となっている。

なお、冬季間の気温や積雪日数と比べて積雪量は少なく、5センチメートル以上の積雪平均日数は62日間となっている。



気温の平年値（昭和62年（1987）～平成28年（2016）の平均値）



降水量の平年値（昭和62年（1987）～平成28年（2016）の平均値）

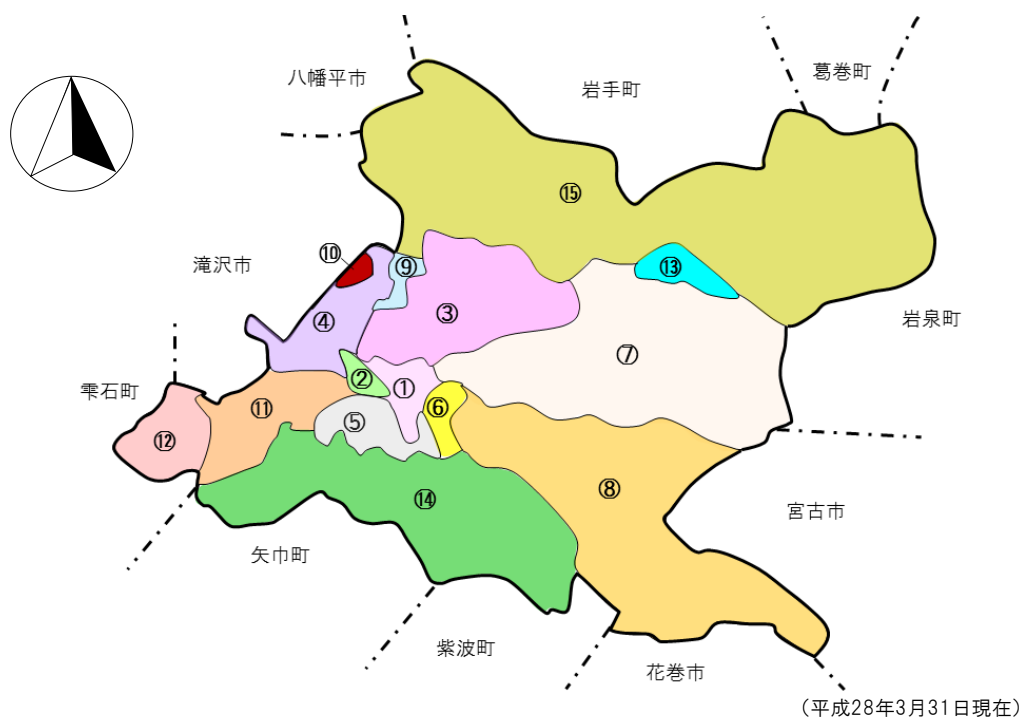
『盛岡市統計書』（平成28年版）

2 社会的環境

(1) 盛岡市の沿革

盛岡市は、明治22年(1889)4月1日、^{みなみいわてぐん}南岩手郡の^{におうむら}仁王村、^{しけむら}志家村の全域と、^{ひがしなかのむら}東中野村、^{かがのむら}加賀野村、^{みつわりむら}三ツ割村、^{やまぎしむら}山岸村、^{しんじょうむら}新庄村、^{せんぼくちょうむら}仙北町村の一部を統合する形で市制を施行した。初代市長には^{めときたかゆき}目時敬之が就任。市制発足時の人口は2万9,190人、面積4.47キロ平方メートルであった。

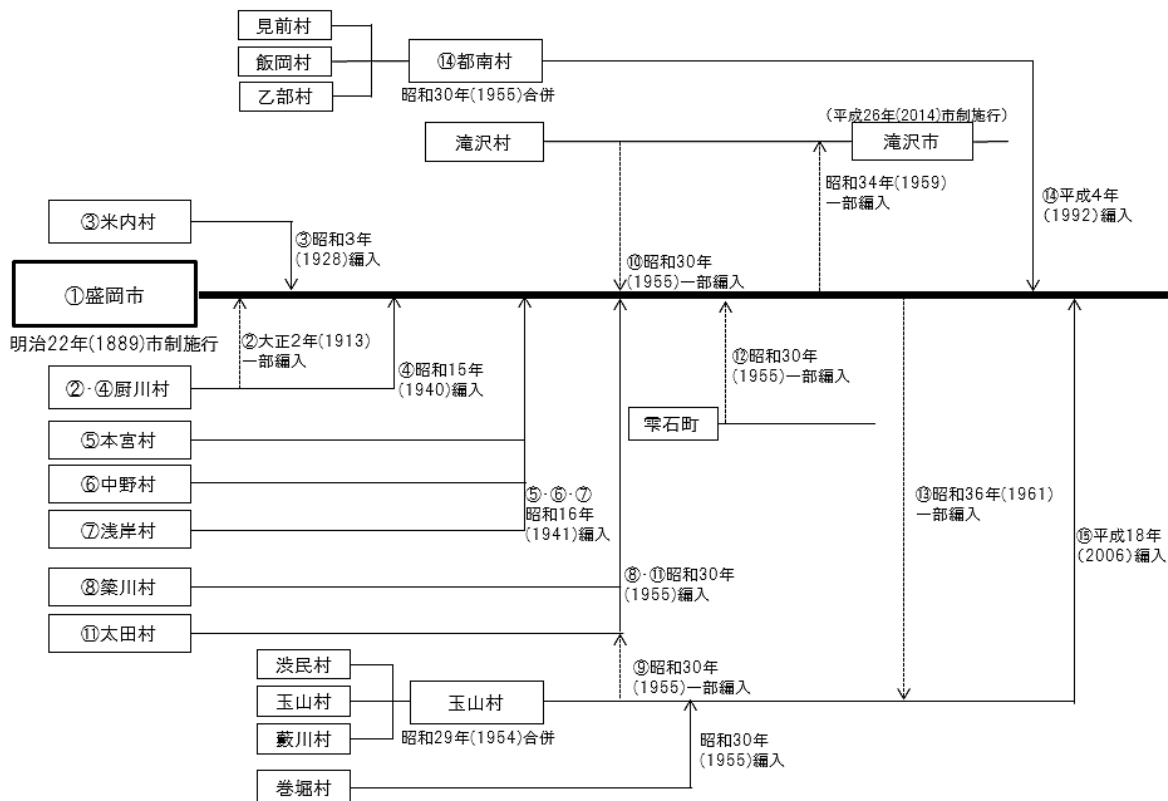
その後、大正2年(1913)に^{くりやがわむら}厨川村の一部、昭和3年(1928)に^{よないむら}米内村、昭和15年(1940)に厨川村の全域、昭和16年(1941)に^{もとみやむら}本宮村、^{なかのむら}中野村、^{あさぎしむら}浅岸村、昭和30年(1955)は^{やながわむら}築川村、^{たまやまむら}玉山村の一部、^{たきさわむら}滝沢村の一部、^{おおたむら}太田村、^{しずくいしちょう}雫石町の一部(繫地区)、平成4年(1992)には^{となんむら}都南村、平成18年(2006)には玉山村の全域を編入し、現在の市域を構成している。



(平成28年3月31日現在)

図中	編入年月日	編入町村名	編入面積 (Kmf)	編入後面積 (Kmf)
①	明治22年(1889)4月1日	市政施行		4.47
②	大正2年(1913)6月11日	厨川村の一部(盛岡駅付近)	1.09	5.56
③	昭和3年(1928)4月1日	米内村	44.17	49.73
④	昭和15年(1940)1月1日	厨川村	21.13	70.86
⑤	昭和16年(1941)4月10日	本宮村	9.86	80.72
⑥	昭和16年(1941)4月10日	中野村	5.27	85.99
⑦	昭和16年(1941)4月10日	浅岸村	133.81	219.80
⑧	昭和30年(1955)2月1日	築川村	134.66	354.46
⑨	昭和30年(1955)2月1日	玉山村の一部(黒石野)	7.88	362.34
⑩	昭和30年(1955)2月1日	滝沢村の一部(牧場)	5.97	368.31
⑪	昭和30年(1955)4月1日	太田村	22.12	390.43
⑫	昭和30年(1955)10月1日	雫石町の一部(繫)	17.33	407.76
	昭和34年(1959)6月1日	滝沢村に一部編入	-0.06	407.70
⑬	昭和36年(1961)2月1日	玉山村に一部編入	-8.98	398.72
	平成元年(1989)10月1日	国土地理院測量結果		398.69
⑭	平成4年(1992)4月1日	都南村	90.46	489.15
⑮	平成18年(2006)1月10日	玉山村(全域)	397.32	886.47

図・表 市域の変遷

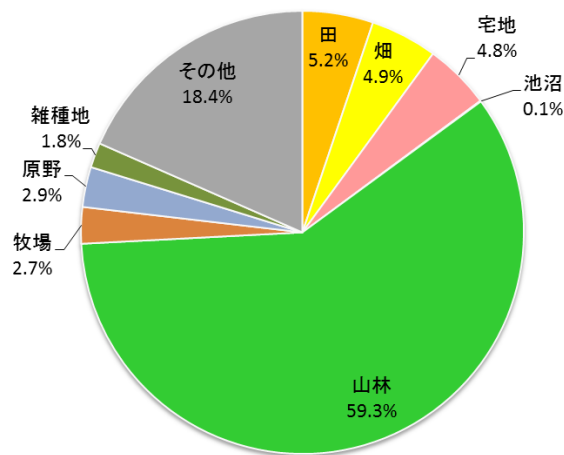


編入・合併の経過

(2) 土地利用

盛岡市は、奥羽山脈や北上高地に続く山々が市街地付近まで続いているほか、市街地の西側から南側に広がる平坦地は、生産力の高い農業地帯となっている。

土地利用の状況は、市域の約62パーセントが山林や原野、次いで水田、畑地などの耕作地が約10パーセント、宅地が約5パーセント、残りが雑種地等となっている。



土地利用の内訳

『盛岡市統計書』(平成28年版)

現在の中心市街地は、城下町を骨格として、昭和初期に行われた土地開発や耕地整理が基盤となっており、北上川と中津川周辺の平坦地に都市機能が集中している。

現在の市街地は、中心市街地周辺の平坦部や国道4号沿いに広がっており、中津川以北の地域では、住宅地が山の斜面部にまで及んでいる。雫石川以北の地域では、国道沿

いに工業用地が形成されているが、住宅地や商業地と混在している。また、雫石川以南の地域は、平成3年（1991）に始まる盛岡南新都市開発により、住宅地及び商業地が広がりを見せているが、周辺には水田や畑地が広がっている。

市域の東側は大部分が山林となっており、市街地付近の国道106号及び築川沿いには住宅地と農地及び工業用地が見られ、山あいの土地を活用した農業が営まれている。

市域の西端に位置する繋地区は、雫石川左岸の平坦地では農地が広がっているほか、右岸の御所湖畔には温泉地が立地している。

市域の南側に位置する旧都南村地区は、北上川沿いと国道4号及び国道396号沿いに住宅地及び商業地が位置しているが、農地との混在も多く見受けられる。また、地区の西側と東側に広がる山地ではリンゴの栽培のほか、畜産や林業などが営まれている。

市域の北側に位置する旧玉山村地区は、国道4号沿いの平坦部に住宅地と農地が混在しているほか、北上川右岸及び松川沿いに農地が広がっている。また、東側の山間部は、自然環境を生かし、畜産や野菜等の栽培、稲作も行われている。

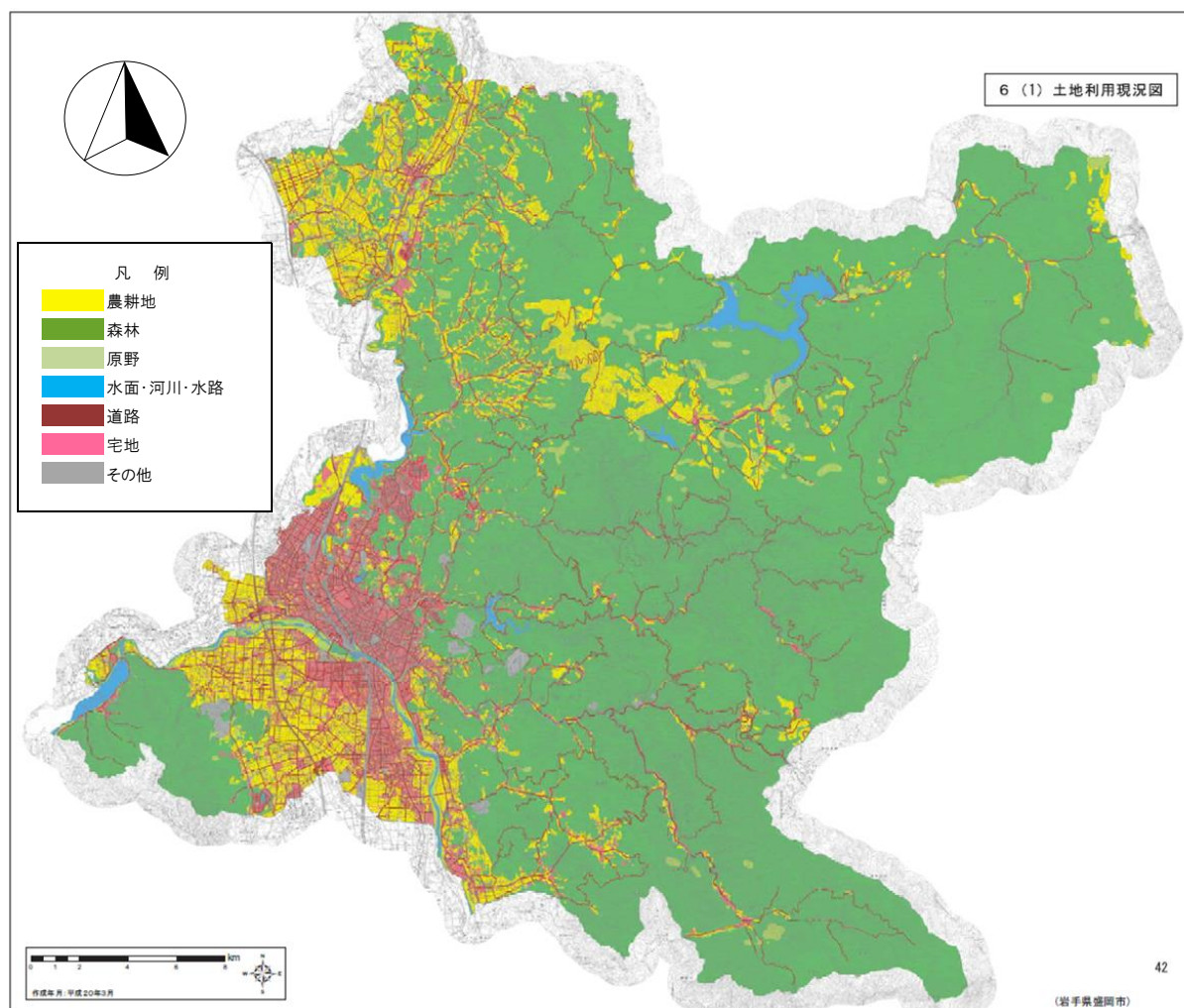


図 土地利用現況図（平成20年（2008）作成）

『国土利用計画盛岡市計画』（平成22年（2010）2月）から引用

(3) 人口動態

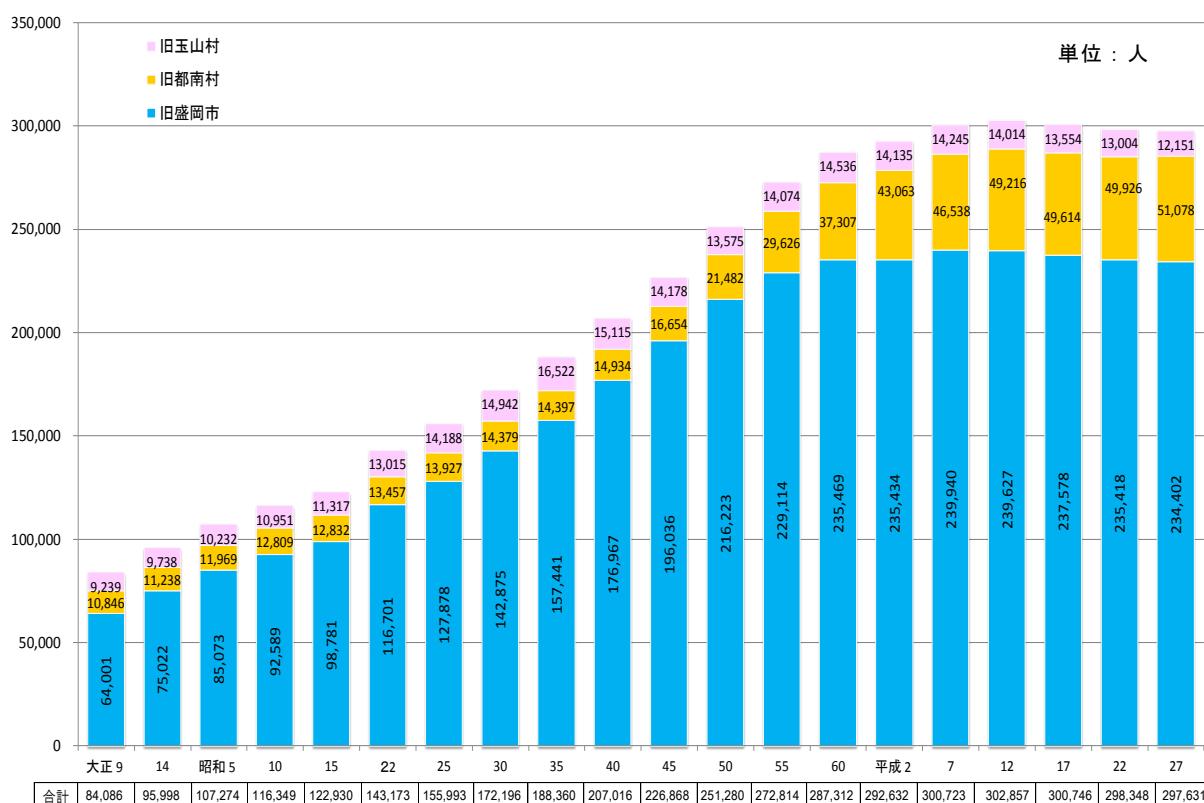
平成 28 年 10 月 1 日現在の盛岡市の人口は 296,701 人、世帯数は 133,993 世帯となっている。

盛岡市は、明治 22 年（1889）の市制施行以来、厨川村、米内村、本宮村、中野村、浅岸村、築川村、太田村の編入による区域の拡張とともに人口は増加を続けてきたが、昭和 50 年（1975）以降になると比較的地価の安い周辺町村への人口流出が見られ、さらに、人口の伸びも鈍化していった。

平成 4 年（1992）に隣接する都南村、平成 18 年（2006）に玉山村を編入し、人口は微増したが、旧市域を中心に減少に転じている。

年齢別の人口構成は、団塊世代ジュニアと呼ばれる、昭和 46 年（1971）～49 年（1974）生まれの人口が多く、次いで、団塊の世代と呼ばれる、昭和 22 年（1947）～24 年（1949）生まれの人口が多い。

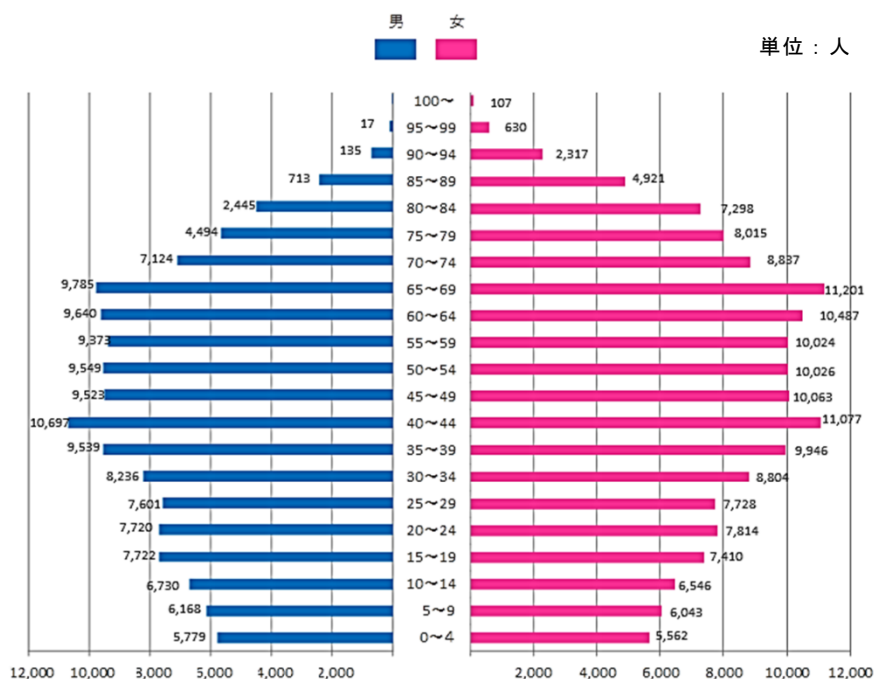
一方、30 歳以下の人口は減少傾向にあり、年少人口（15 歳未満）は、生産年齢人口（15 歳～64 歳）や 65 歳以上の老年人口の割合を下回っていることから、少子高齢化の進行傾向が継続するものと予測される。



総人口の推移（大正 9 年（1920）～平成 27 年（2015））

※旧盛岡市：平成 27 年 3 月 31 日時点の市域から、旧都南村・旧玉山村を除いた区域

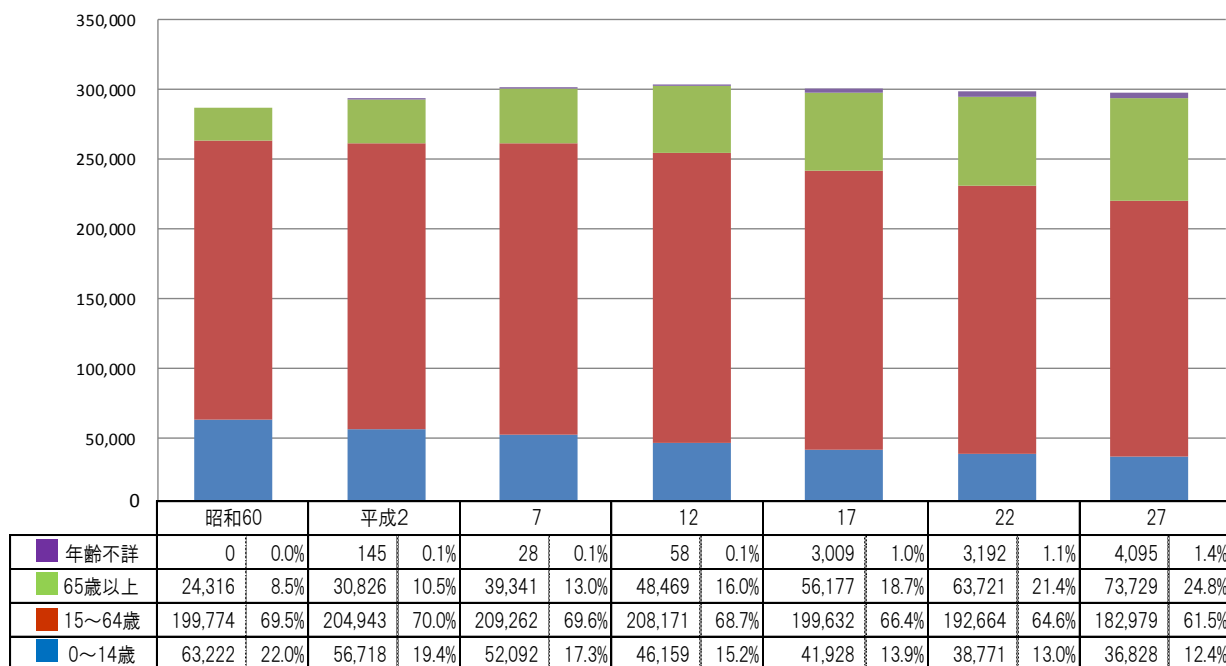
『平成 27 年国勢調査』（総務省統計局）



年齢別人口構成図

『平成 27 年国勢調査』(総務省統計局)

(単位：人)



年齢3区分別人口の推移 (昭和60年(1985)~平成27年(2015))

『平成 27 年国勢調査』(総務省統計局) をもとに編集

(4) 交通機関

盛岡市における道路交通網は、埼玉県川口市を起点とし、青森県青森市へ至る東北自動車道と幹線道路として宮城県や青森県方面を結ぶ国道4号が南北に走っている。

また、日本海側の秋田市に向かう国道46号、太平洋側の宮古市と通じる国道106号、岩泉町と通じる国道455号、遠野市と通じる国道396号、秋田県鹿角市を通り青森県平川市に通じる国道282号が整備されている。平成25年(2013)12月には国道46号盛岡西バイパスが開通し、国道4号及び東北自動車道盛岡南インターチェンジまでの渋滞の緩和と通過交通の分散につながっている。

鉄道網としては、東京と新函館北斗を結ぶJR東北新幹線、東京一盛岡間のJR東北本線、盛岡と大曲(秋田県)をつなぐJR秋田新幹線・田沢湖線、三陸沿岸と盛岡を結ぶJR山田線(盛岡一釜石)、IGRいわて銀河鉄道好摩駅から秋田県大館駅を結ぶJR花輪線のほか、盛岡駅から目時(青森県三戸町)を結ぶIGRいわて銀河鉄道が乗り入れており、盛岡駅は交通の結節点となっている。

バス交通網は、岩手県交通株式会社及び岩手県北自動車株式会社による路線バスが市内を運行しているほか、東北自動車道を活用し、青森県方面や宮城県、関東方面へ運行するバスも発着している。

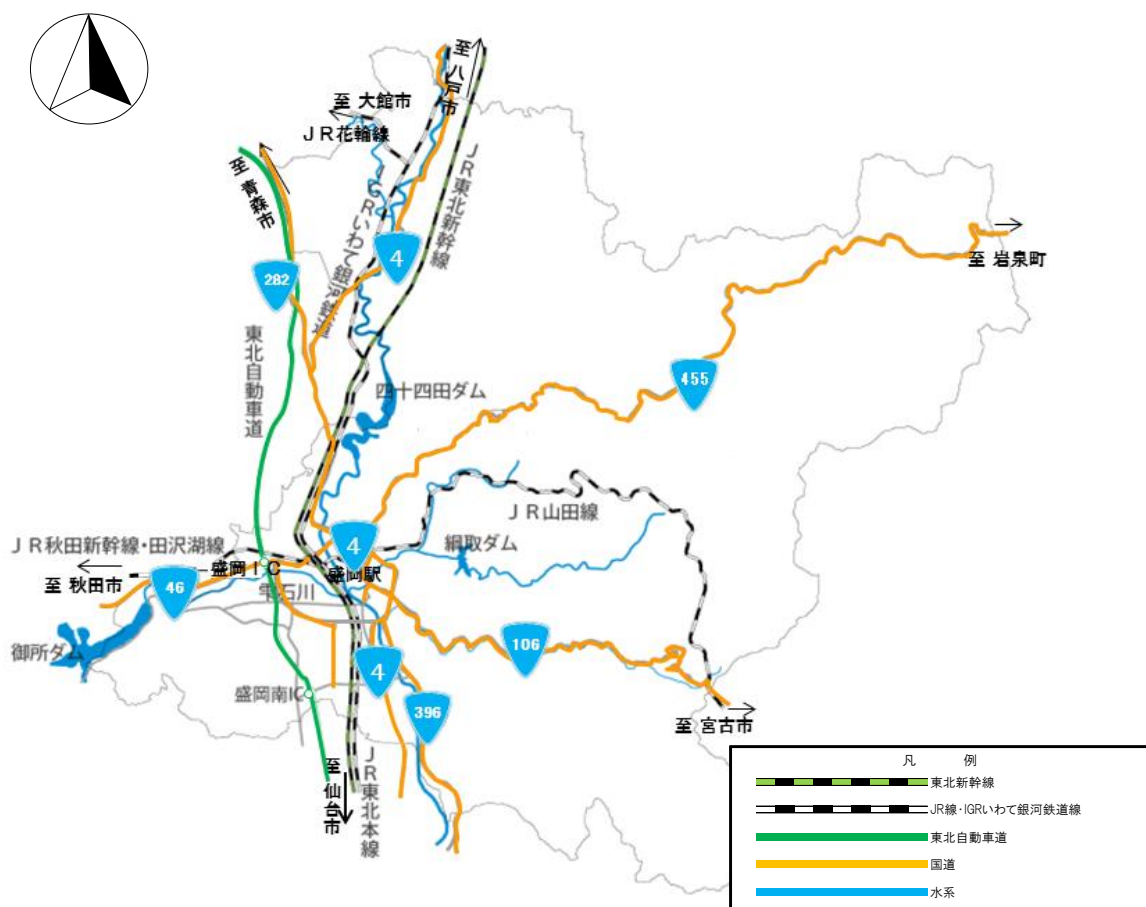
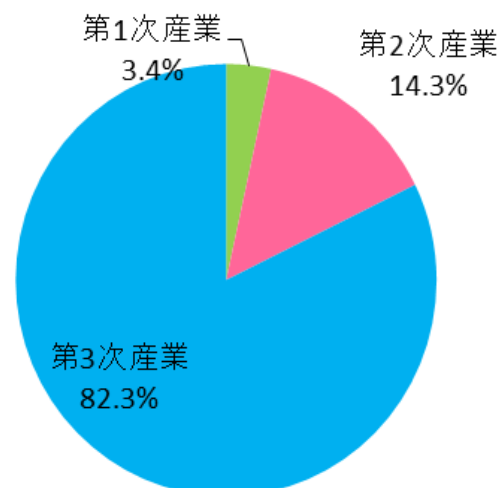


図 主な交通網

(5) 産業

盛岡市の平成 27 年（2015）の産業別商業者数（同年国勢調査）は、就業者 139,891 人のうち、農業・林業の第 1 次産業就業者が 4,797 人で全体の 3.4 パーセントを占め、減少が続いている中、高齢化が進んでいる。

製造業を中心とする第 2 次産業就業者は、20,013 人で 14.3 パーセントを占めている。また、卸売業・小売業、サービス業等の第 3 次産業就業者は 115,081 人で 82.3 パーセントと極めて高い割合となっており、東北では仙台市（82.6 パーセント）と並んで商業中心の都市であることを示している。



盛岡市の産業別就業者数の割合

『平成 27 年国勢調査』（総務省統計局）

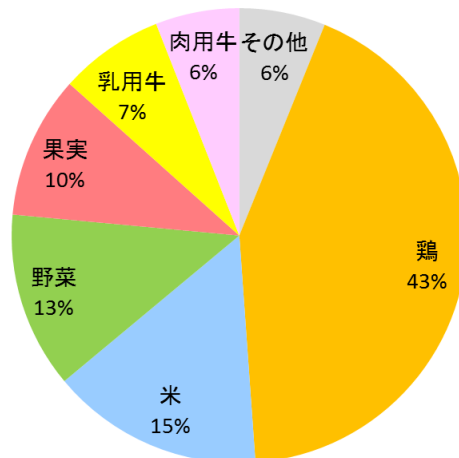
ア 農業

現在、盛岡で最も作付されている作物は水稲で、平成 28 年（2016）度の作付面積は 2,682 ヘクタール、収穫量は 15,341 トンとなっている。しかしながら、水稲の作付面積は年々減少しており、代わって「南部小麦」に代表されるブランド小麦や大豆の生産量が増えている。

本州で最初にリンゴの栽培が始められた盛岡は、一日の寒暖差が大きいことなど、気候がリンゴの生産に適しており、市域の南部を中心とした地区で、糖度が高く、味の良い品種が生産され、全国でも高い評価を得ている。

畑作では、ねぎ、きゅうり、トマト、だいこんなどが主に作付されており、県内だけではなく、関東方面にも多く出荷されている。

盛岡における平成 27 年（2015）の農業産出額は 1,764 千万円で、鶏（鶏卵・ブロイラー）の産出額が（754 千万円）最も大きく、次いで米（266 千万円）、野菜（221 千万円）となっている。



農業産出額の割合

『平成 29 年度 盛岡の農林業』（農政課）

部 門	農業産出額	上位部門						その他
		第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	第6位	
		鶏	米	野菜	果実	乳用牛	肉用牛	
金額(千万円)	1,764	754	266	221	179	131	105	108

資料：農林水産省

※「鶏」は、鶏卵及びブロイラーの計

『平成29年度 盛岡の農林業』（農政課）

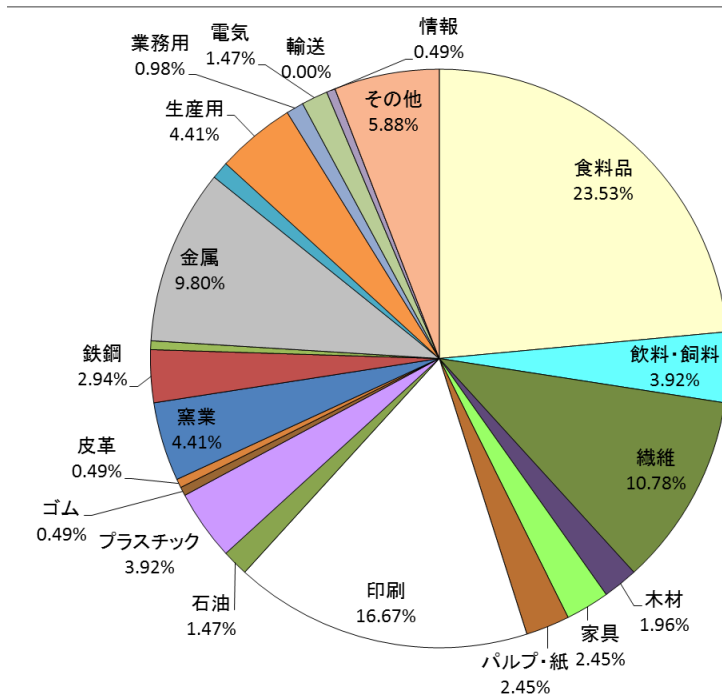
イ 工業

盛岡市は、鋳物（南部鉄器）や染物（紫根染や古代型染）のほか、清酒等の食品加工といった伝統的な地場産業を中心に発展してきた。

戦後、工場と住居との混在の解消、業務の効率化・合理化等の促進を目的として、工場の集団化が推進され、昭和47年（1972）には盛岡南工業流通団地、昭和54年（1979）に盛岡工業団地が完成したほか、平成元年（1989）に盛岡中央工業団地、平成19年（2007）には盛岡テクノパーク企業団地等の工業団地が整備されている。

また、南部鉄器や南部せんべいといった地場（伝統）産業の振興を目的として、盛岡手づくり村が昭和61年（1986）にオープンするなど、旧市街地に立地していた伝統的産業の工場は郊外に移転していった。

なお、平成27年（2015）の盛岡市における製造業事業所数は204事業所で、業種別に見ると、「食料品製造業」が48事業所（約24パーセント）で最も多く、次いで「印刷・同関連業」が34事業所（約17パーセント）、「繊維工業」が18事業所（約11パーセント）となっている。



製造業事業所の割合（平成27年度）

『盛岡市統計書』（平成28年版）

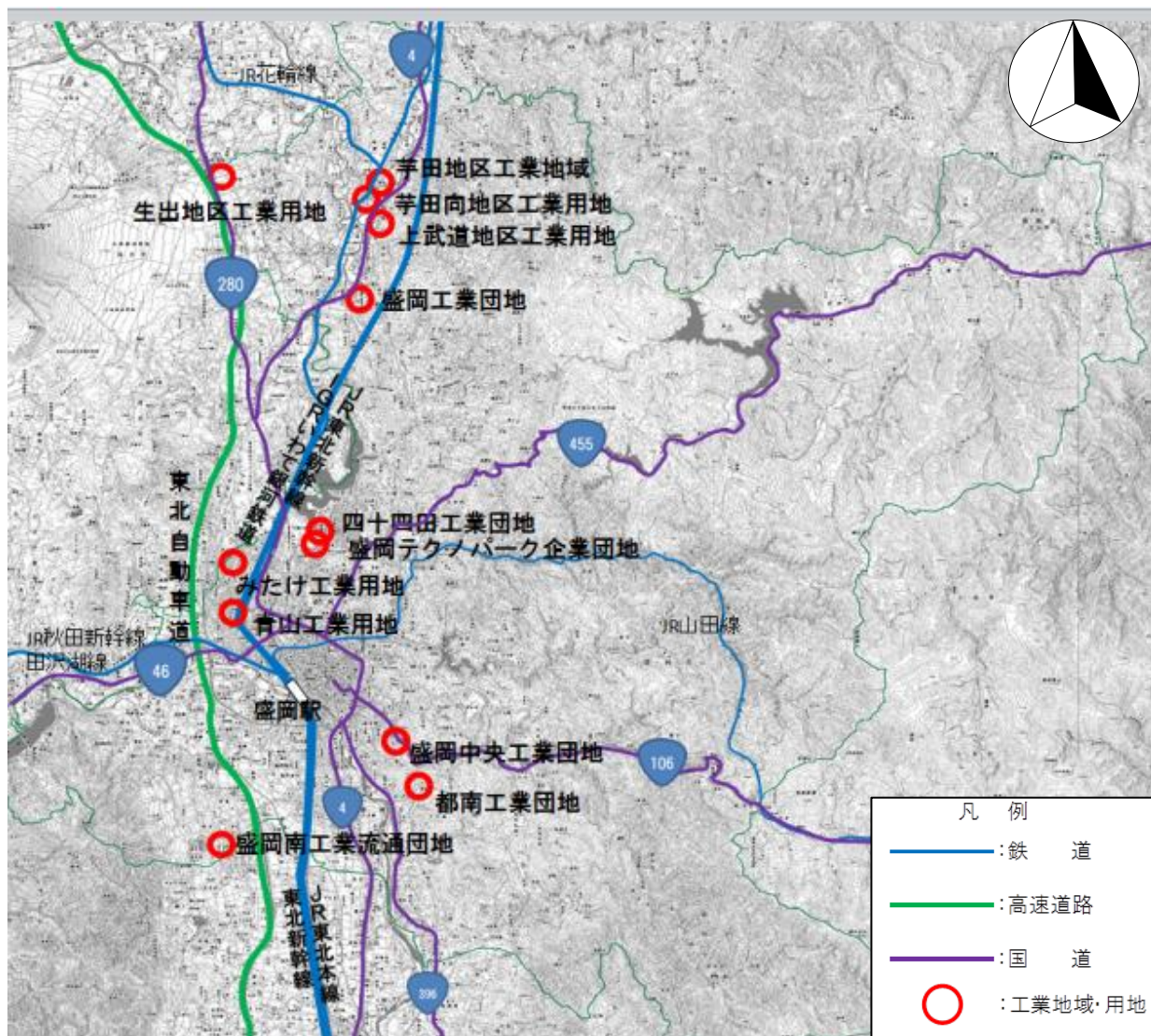


図 盛岡市内の工業団地・工業用地

ウ 商業

盛岡市は、江戸時代以降、盛岡藩及び岩手県
の中心地であり、流通・販売の拠点としての優
位性を背景として発展してきた。

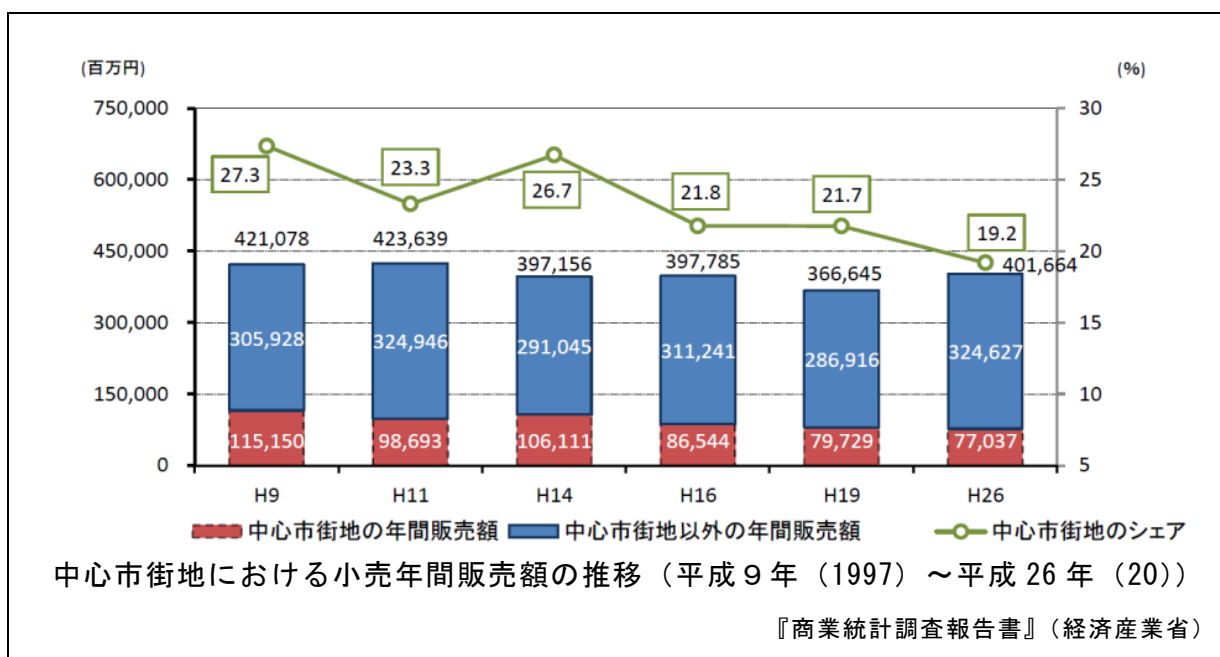
その中で、中心市街地の商店街は、商品の販
売という役割だけではなく、地域文化や伝統の
承継・発展などのコミュニティ活動を担う役割
と、地域住民が交流する場を提供してきたが、
近年は高齢社会の進展や郊外型大型店の立地が



よ市（材木町）

進んだことにより、商店街の年間小売販売額、

店舗数等が減少傾向にあり、卸・小売の年間販売額は減少傾向が続いているが、4月から11月までの毎週土曜日、材木町で開催されている「よ市」に代表される定期的な「市」や、歩いて楽しめるイベント等を開催するなど、それぞれの商店街が工夫を凝らし、中心市街地の賑わい創出に取り組んでいる。



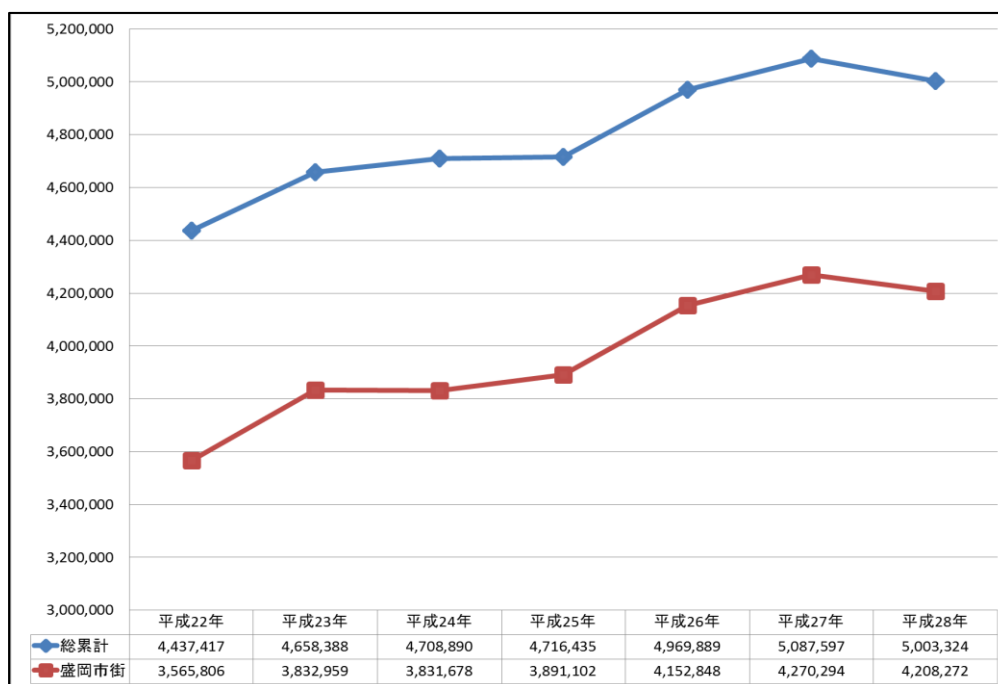
(6) 観光

盛岡市には、城下町形成の原点となった史跡盛岡城跡、重要文化財に指定されている岩手銀行旧本店本館や旧第九十銀行本店本館といった歴史的建造物のほか、我が国の伝統的工芸品第一号指定を受けた南部鉄器、チャグチャグ馬コ、さんさ踊り、盛岡八幡宮の例大祭といった四季折々の祭りや行事、わんこそばや盛岡冷麺、南部せんべいなどの食文化など、多くの観光資源が存在している。

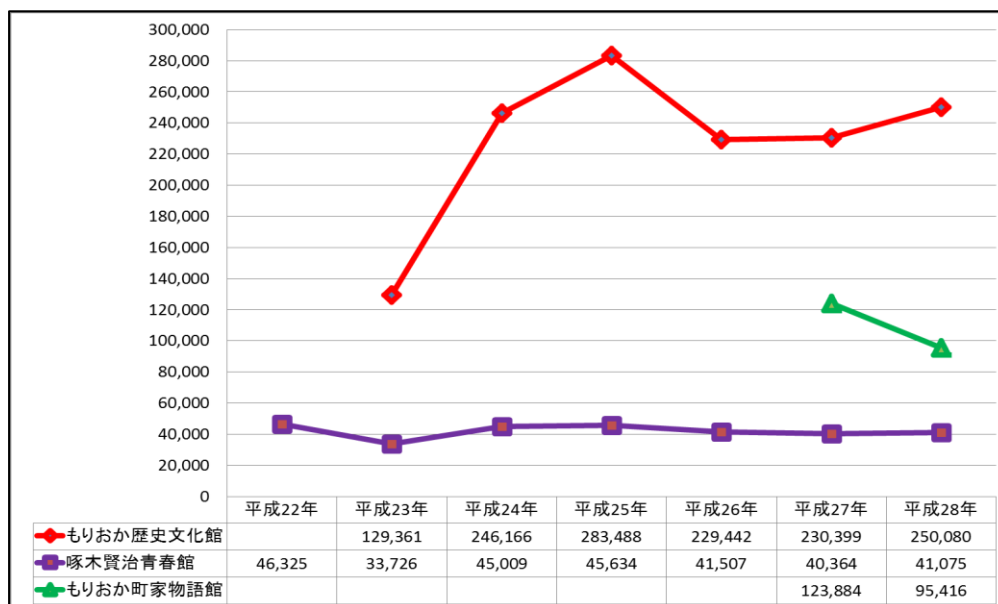
観光入込客数(※)は、平成22年（2010）には4,437,417人回であったが、平成23年

※観光入込客数：日常生活圏以外の場所に観光目的で旅行し、旅行先の都道府県内の観光地点を訪れた観光入込客を計測した値。

(2011) 3月の東日本大震災以降、全県規模で取組んだ大型観光キャンペーンやテレビドラマの波及効果、復興関連の事業者等の宿泊などにより、平成23年(2011)は4,658,388人回、平成27年(2015)には5,087,597人回と増加傾向にあったが、平成28年(2016)は5,003,324人回と、わずかであるが減少している。



観光入込客（単位：人回）



観光施設の入館者数（単位：人回）

(観光交流課提供)

注) もりおか歴史文化館は平成23年(2011)開館、もりおか町家物語館は平成26年(2014)開館

3 盛岡市の歴史

(1) 旧石器時代～縄文時代

盛岡市は、北上平野の北端にあたり、北・東・西は山々に囲まれているが、北上平野を南北に流れる北上川と奥羽山脈を水源とする雫石川、北上高地を水源とする中津川・築川等が市の中心部で交わっており、豊かな自然とともに古くから人々の営みや交流があったことを物語る遺跡が多く発見されている。

本市における旧石器時代の遺跡は、岩洞ダム（岩洞湖）畔にある、小石川遺跡、大橋遺跡（藪川）、館坂遺跡（前九年二丁目）において確認されており、中でも小石川遺跡からは、約1万3,000年前の地層から当時の人々が使用した石器が発見されている。

縄文時代には、野山には食料となるクリやクルミ、ドングリが実る落葉広葉樹林の広がりと共に、これら森の恵みを食料とするため、土器を使用して調理し保存することが可能となり、それに伴って食生活が向上、人口も増え、大きなムラを構成するようになっていった。

市内から出土した最も古い土器は、大新町遺跡（大新町）で発見された「爪形文土器」で、約1万1,000年前〔縄文時代草創期〕のものと考えられている。

縄文時代中期（約5,000～4,000年前）の東北地方は、津軽海峡の南北に広がる「円筒式土器文化」と、南東北地域を中心とする「大木式土器文化」に分かれていたが、盛岡周辺では、繫V遺跡出土の深鉢形土器に代表される渦巻文様が特徴的な大木式土器文化に主体を置きながら、北東北地方を中心に分布する円筒式土器文化も受け入れていることが確認されており、北と南の文化が触れ合う地域であったと考えられている。

また、大館町遺跡（大新町）や繫V遺跡（繫）、柿ノ木平遺跡（浅岸）、川目C遺跡（川目）などの大規模な集落遺跡からは、大量の土器や石器とともに、北陸地方の糸魚川流域で産出されるヒスイを用いた装飾品や、北海道や中部地方で産出される黒曜石、土器の補修や矢じりの接着に用いられた天然アスファルト、岩手県久慈市を中心に産出しているコハクも発見されており、広範囲にわたる交流があったことが確認されている。



深鉢形土器（繫V遺跡）
（重要文化財）



土偶（手代森遺跡）
（重要文化財）

縄文時代後期～晩期になると、ムラの規模も小さなものとなり、石をさまざまな形に並べたストーンサークルなどが作られるようになる。日常的に使用する土器のほかに、^{てしろもり}手代森遺跡出土品に代表される土偶、^{がんぐう}岩偶、石棒、石剣、石刀なども多く出土することから、頻繁にまじないや儀式が行われていたものと考えられている。

(2) 弥生時代～古墳時代

弥生時代に入り、多くの地域では採集から農耕へと生活基盤が変化したが、東北北部から北海道地域では、縄文時代の文化や生活様式が色濃く続いていたと考えられている。

盛岡周辺では、この時代の遺跡はあまり多く発見されていないが、西日本の弥生土器の影響を受けた土器が出土している。

古墳時代の盛岡周辺では、^{ふんきゆう}墳丘が造られ、^{ほにわ}埴輪の置かれるような古墳は造られなかったが、永福寺山遺跡（山岸）や^{やくししやわき}薬師社脇遺跡（浅岸）で発見された^{どこうぼ}土坑墓※からは、この地域が北の^{ぞくじょうもん}続縄文文化と南の古墳文化の接点であったことを示す遺物が出土している。

古墳時代の終わり頃になると、それまで小さな墓穴に葬られていた有力者たちは、小規模な古墳に葬られるようになっていった。これらの古墳からは、大和朝廷との交流をうかがうことのできる副葬品が出土しており、7世紀代に造られたと考えられている^{うえだえぞもり}上田蝦夷森古墳群（^{くろいしの}黒石野）からは、鉄製の^{しょうかくつきかぶと}衝角付冑や耳飾などが出土している。また、8世紀代に作られたと考えられている^{おおたえぞもり}太田蝦夷森古墳群は、川原石で造られた主体部を持ち、^{わどうかいちん}和同開珎、^{おびかなぐ}帯金具のほか、^{まがたま}勾玉やガラス小玉などが出土している。



土坑墓（薬師社脇遺跡）



上田蝦夷森古墳



衝角付冑（県指定）

（上田蝦夷森古墳出土）

(3) 古 代

【奈良時代】

奈良時代になると、平野部の小高い土地を利用してムラが営まれるようになり、周囲の低い湿地などを活用した水田耕作が営まれるようになったと考えられている。

※土坑墓：土に穴を掘って埋葬した墓

市内では、8世紀の初め頃から百目木遺跡(三本柳)や西鹿渡遺跡(三本柳)に代表される奈良時代の集落が、農業生産力の向上を背景に稲作に適した平野部に広がりをもつようになっていった。

百目木遺跡の集落は、1辺7メートルほどの大型の^{たてあな}堅穴建物跡を中心に、その周囲に中・小型の堅穴建物が数棟並んで確認されている。また、かまどの煙出しを西又は北方向に揃えて作られていることも特徴的で、血縁社会で構成される^{えみし}蝦夷社会の様子を知ることができるものとして注目される。



古代の集落跡

【志波城の造営】

(上：西鹿渡遺跡，下：百目木遺跡)

国の支配が及んでいない北東北を勢力下に治めるため、中央政府は、城柵を造営し、城柵を拠点に勢力を北上させていった。

延暦16年(797)に征夷大將軍に任じられた坂上田村麻呂が胆沢を平定した翌年、延暦21年(802)に胆沢城(奥州市水沢区)が築かれ、翌延暦22年(803)年に志波城(中太田・下太田)が築かれた。志波城は、雫石川を北に、北上川を東に見る平野部にあり、政庁(内郭)、外郭、外大溝の三重構造であった。

中心におかれた政庁内には「品」字形の建物配置が見られ、その周囲に実務を執り行った^{かん}官衙建物が存在する。外郭は築地堀に囲まれ、各辺の中央にそれぞれ門が設けられるとともに、60メートル間隔で^{やぐら}櫓が備えられていた。



志波城跡(史跡)

この外郭築地の内側には、兵士の家や工房と考えられる数多くの堅穴建物跡が発見されている。これら堅穴建物からは、刀や^{やじり}鍬、^{かつ}甲冑等の武具、^{くつわ}轡等の馬具のほか、^{すき}鎌や^{てつおの}鋤等の農具、^{やりがんな}鉄斧、^{のみ}槍鉋、^{のみ}鑿等の工具も出土している。

これらの堅穴建物には、政府によって派遣された多数の兵士が暮らし、軍事と行政の拠点として^{えみし}蝦夷と呼ばれた人々との交渉に当たっており、志波城は行政庁(役所)としての役割に比重を置きながらも、周囲の軍事的緊張にも対応できる機能を持っていたものと考えられている。

志波城は、造営から11年後、水害を理由に廃止となり、規模を大幅に縮小して^{とくだん}徳丹城(矢巾町徳田)に移転した。政府の度重なる東北への軍事政策と大規模な工事(長岡京・平安京の造営)により国家財政は行き詰まり、これに伴う改革が実施された。徳

丹城も9世紀中頃には機能が失われ、北上盆地を中心とする地域の統治は、鎮守府ちんじゅふの置かれた胆沢城において担われ、各地域の統治は、地域の有力者の手に委ねられていったと考えられている。

【志波城移転後の盛岡】

志波城が移転した後のこの地域は、地元の有力者が統治を引き継ぎ、安定した社会が続いたと考えられており、奈良時代には、集落が無かったところにも集落が営まれるようになっていった。

志波城の東側に隣接する林崎遺跡はやしざき（本宮もとみや）や中津川と米内川の合流点近くに位置する堰根遺跡せきね（浅岸ほったてぼしらたてもにあと）からは、竪穴建物跡のほかにも大型の掘立柱建物跡が確認されていることから、宗教的な儀式を行い、権威を高めた有力者の拠点と考えられている。また、高床式の倉庫と考えられる建物跡を伴う集落跡が、飯岡才川遺跡いいおかさいかわ（飯岡新田いいおかしんでん）、小幅遺跡こはば（本宮もとみや）、細谷地遺跡ほそやち（向中野むかいなか）などで確認されている。



大型掘立柱建物跡

（林崎遺跡）

【安倍氏と前九年合戦】

平安時代中期の10世紀後半代、陸奥国鎮守府胆沢城ざいちょうかんじんの在庁官人として勢力を伸ばした安倍氏あべは、11世紀中頃までには「奥六郡おくろくぐん」と呼ばれた北上盆地とその周辺を治めていた。

安倍氏は、胆沢郡などを拠点に奥六郡の各地に柵と呼ばれる拠点を築いて一族を配置しており、盛岡の厨川地域くりやがわには厨川柵くりやがわのさくや姫戸柵うぼとのさくが存在したと伝えられている。

永正6年（1051）、安倍氏の勢力が衣川ころもかわよりも南に進出し始めたため、これを制止しようとした陸奥国司軍と安倍頼時あべのよるときが衝突し合戦となった。この後、源頼義みなもとよりよしが陸奥守鎮守府将軍ちんじゅふしょうぐんになると、安倍氏は一旦服従したが、国司側の挑発により再び合戦となった。

天喜5年（1057）安倍頼時が戦死した後も、頼時の息子である安倍貞任さだとう、宗任むねとう、家任いえとう、重任しげとうらを中心に強く抵抗したため合戦は長期化したため、康平5年（1062）、源頼義・義家よしかに出羽の清原氏きよはらが合流したため、安倍氏は劣勢となり、同年9月、厨川柵で滅亡した。

安倍氏の最後の拠点となった厨川柵、姫戸柵は雫石川の北側に立地したと考えられているが、現在のところ場所は特定されておらず、これまで厨川柵跡と考えられていた安倍館遺跡あべたて（安倍



安倍館遺跡

館町), や里館遺跡(天昌寺町)については, どちらも中世城館遺跡であることが判っており, 安倍氏の時代の痕跡は発見されていないが, 安倍館町や上堂, 前九年, 夕顔瀬町周辺には安倍氏や源義家に関連する伝承が残されている。

(3) 中世

【後三年合戦と平泉藤原氏】

安倍氏が滅亡した後, 出羽の清原氏は, それまでの出羽仙北三郡に加え, 安倍氏の奥六郡をも支配し, 奥羽の豪族として初めて陸奥鎮守府将軍に任官した。永保3年(1083), 清原真衡と家衡の兄弟に争いが起こり, 真衡の死後は清衡と家衡とが争った。これに陸奥守源義家が介入。源義家と清原清衡は苦戦の末, 金沢柵(横手市)にて清原家衡・武衡を破った。その後, 清原清衡は父の藤原姓を名乗るようになり, 拠点を平泉に移した。

平泉藤原氏は, 清衡, 基衡, 秀衡, 泰衡の4代にわたり, 平泉を拠点到奥羽を統治。斯波郡には藤原氏一族の比爪氏が拠点を構え, 岩手郡も支配していたものと考えられている。

当時の遺構や遺物が発見されている稲荷町遺跡(大館町・稲荷町)は, 堀を巡らせた居館であり, 浅岸に所在する堰根遺跡, 柿ノ木平遺跡, 上村屋敷遺跡, 前野遺跡, 薬師社脇遺跡, 下米内の落合遺跡では, 屋敷や集落の跡が確認されているほか, 平泉藤原氏に関連する遺跡と共通する陶磁器が出土している。

このほか, 繋の一本松経塚からは渥美(愛知県)の灰釉壺が, 内村遺跡(下飯岡)からは常滑産(愛知県)の大甕, 湯壺経塚(湯沢)からは常滑産の壺が出土していることなどから, 盛岡周辺は平泉藤原氏の直接的支配が及んでいた地域と考えられている。

【鎌倉時代の盛岡】

文治5年(1189)9月, 源頼朝は平泉藤原氏を攻略し, 同年9月11日には岩手郡厨川まで北上し, 8日間滞在した。9月12日には甲斐の工藤行光を岩手郡の地頭に任



稲荷町遺跡

(昭和20年(1945)米軍撮影)



渥美灰釉壺(伝一本松経塚出土)

(県指定)



堰根遺跡

じ、奥州総奉行には武蔵の葛西清重が任じられ、平泉を拠点に奥羽両国を支配した。

なお、斯波郡の地頭には下野の足利氏が入り、やがて郡名を苗字として斯波氏を名乗るようになった。

鎌倉時代の武士たちは、堀で囲まれた館に居住し、領地支配の拠点としていた。盛岡市内でも、

台太郎遺跡（向中野）において、不整長方形の堀に囲まれた居館跡が確認されており、鎌倉時代中期から南北朝期にかけて生産された陶磁器類が出土している。



台太郎遺跡

【南北朝～戦国時代の盛岡】

南北朝時代以降、糠部地域には南部氏を中心とする勢力、岩手郡には厨川の工藤氏、雫石（滴石）に戸沢氏、現在の盛岡市中心市街地付近には福士氏、玉山地区には玉山、日戸、渋民、下田の諸氏が、盛岡市南東部には大ヶ生氏、乙部氏、手代森氏、南西部には太田氏のほか、飯岡氏、永井氏などの豪族が存在した。

室町時代から戦国時代にかけて、志和御所と呼ばれた足利一門の斯波氏は、斯波郡を拠点に雫石や猪去に一族を配置するなど、一時は岩手郡方面まで影響下に置いていたが、戦国時代中頃から糠部地域の三戸南部氏の力が強大となり、天正16年（1588）南部信直によって斯波氏は滅亡した。

(4) 近世

【南部氏による藩政】

南部氏は、清和源氏の流れをくむ甲斐源氏の一族とされ、平安時代の末期に加賀美遠光の第三子光行が、甲斐国巨摩郡南部郷（山梨県巨摩郡南部町）を領したことにより「南部」を名乗るようになった。



図 南北朝～室町時代の盛岡周辺

盛岡市遺跡の学び館第2回企画展図録『乱世を駆け抜けた武将たち』から引用、一部加筆編集



図 東北の戦国武将（16世紀後半）

『もりおか歴史文化館常設展示ガイド』から引用

建武元年（1334），奥州国司北畠顕家は、南部師行を糠部郡奉行として派遣した。師行とその弟政長は、糠部の八戸を拠点に活動し、南北朝の混乱期には奥州における南朝方として活躍。南北朝合一から室町時代中期にかけて、師行、政長の子孫である八戸の根城南部氏（後の遠野南部氏）は糠部の代表的領主であり続けた。

この頃の糠部には、一戸、三戸、七戸などにも南部氏の一族が存在し、ほかにも浄法寺氏、九戸氏、久慈氏、四戸氏などの有力領主が存在していたが、戦国時代に入るとそれら南部氏一族の中から三戸南部氏が台頭し、南部晴政の代には根城南部氏を超える勢力となった。

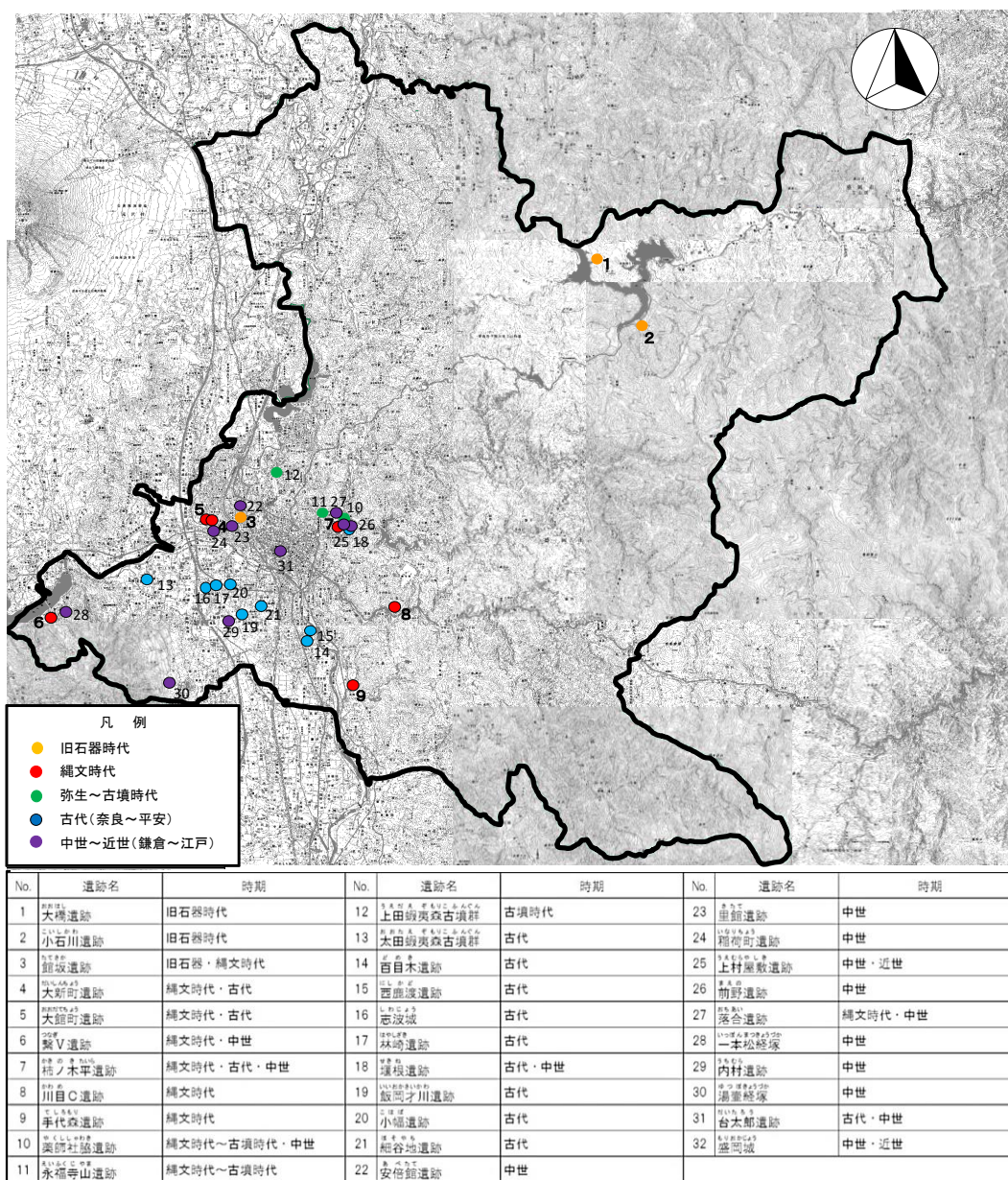


図 本文で紹介した遺跡の位置

三戸南部家の当主晴政^{はるつぐ}と晴継^{はるつぐ}が、天正10年(1582)、相次いで死去すると、一族の田子九郎信直^{たのこくろうのぶなお}が三戸南部家の当主となった。

しかし、九戸氏や久慈氏^{くしびき}、櫛引氏、七戸氏などは信直の相続について不満を持ち、三戸の南部信直と対立を深めていった。

天正14年(1586)から同16年(1588)にかけ、南部信直は岩手郡から志和郡に攻め入り、鎌倉時代以来の領主斯波氏を滅ぼした。この間、天正15年(1587)には加賀の前田利家を介して豊臣秀吉に臣下の礼をとり、天正18年(1590)には豊臣秀吉の小田原攻めに参陣^{なんぶしちぐん}、南部七郡の領有を認められた。

その後、九戸政実^{まさざね}が南部信直に対して反乱を起こすと、天正19年(1591)7月には豊臣秀次^{とよとみひでつぐ}を総大将とする仕置軍が派遣され、各地の反乱を鎮圧しながら北上、同年9月2日から9月4日には九戸氏の本拠地である九戸城を攻撃し鎮圧。領内の一大勢力を滅ぼした。

九戸合戦の直後、豊臣家の重臣^{あさのながまさ}浅野長政の勧めにより、南部信直は居城を三戸から不來方^{こずかた}※の地に移転することが決定された。文禄元年(1592)肥前名護屋^{ひぜんなごや}に出陣していた南部信直は、豊臣秀吉の内諾を得て、慶長2年(1597)(又は翌慶長3年)に築城を開始、嫡子利直^{としなお}を総奉行として北上川と中津川の合流点付近の小高い丘を中心に工事を進めた。

城と城下の建設は、北上川や中津川の度重なる氾濫や降雪期の工事中止などにより長期にわたった。城の周囲には低地や湿地が多く、内丸に所在した福土氏^{けいぜんたて}の慶善館を切り崩し、周囲の低地を埋め立てたほか、城下北西側の湿地帯^{うえだくみちよう}に上田組町^{うえだぐみ}を建設するにあたって、水源地上田堤^{うえだづつみ}(現在の高松の池)を築堤して堰き止め、用水堰を通して北上川に排水した。また、城下町の中央を流れる中津川には、慶長14年(1609)に上ノ橋^{かみのはし}、同16年(1611)には中ノ橋^{なかのはし}、同17年(1612)には下ノ橋^{しものはし}が架けられ、しだいに城下町が整備されていった。

※「不來方」:盛岡の古称。前九年合戦の後、清原氏の一族の迂志方太郎頼貞(こしかたたろうよりさだ)が、この地に城を築いたことにちなんだもの。この地を荒らしまわった鬼が三ツ石の神に捕まり、岩に手形を押して二度と来ないことを誓ったことから命名されたものなど諸説ある。



図 天正19年(1591)時点の南部信直の所領

『もりおか歴史文化館常設展示ガイド』から転載

城下町の整備が進むと、盛岡城では、元和3年（1617）から同5年（1619）にかけ、本丸の拡張や淡路丸、三ノ丸に石垣を築くなどの改修が行われた。

寛永9年（1632）8月、江戸で南部利直が死去し、同年10月、嫡子の重直が家督を継いだ。

寛永10年（1633）5月、重直は一応の完成をみた盛岡城に入城し、これ以降は盛岡藩歴代の居城として定着した。寛永11年（1634）8月には、江戸幕府により、北、三戸、二戸、九戸、鹿角、閉伊、岩手、志和、稗貫、和賀の10郡、都合10万石の領地と軍役が決定された。

寛文4年（1664）9月に、藩主の重直は世継ぎを決めないまま死去したため、幕府の裁定に

より、嫡子重信に8万石、弟の直房に2万石を分け与え、分割相続することが決定され、八戸藩が誕生した。その後盛岡藩には、天和3年（1683）に新田開発分の2万石が加増され、10万石に復帰している。

文化5年（1808）12月、盛岡藩は蝦夷地経営の実績により、20万石への高直し※（文化の高直し）が行われ、藩としての格式は高くなった。しかし、領地の加増による収入の増加が伴わず、蝦夷地警備の負担増が義務付けられるなど、盛岡藩の財政は慢性的な赤字体質となり、破綻寸前まで追い詰められた。藩財政の破綻は、そのまま領民への重い負担へと変わり、度重なる凶作も追い討ちをかけ、多くの一揆として現れた。

慶応3年（1867）10月、徳川慶喜は大政を奉還し、王政復古の号令が發布された。盛岡藩は、東北・越後の諸藩とともに、仙台領白石で合議し奥羽越列藩同盟に加わった。慶応4年（1868）7月に秋田藩、弘前藩が相次いで脱退したため、盛岡藩は、秋田領に侵攻し交戦した。戦況は当初こそ盛岡藩が優位であったが、佐賀藩を中心とした新政府軍の加勢のため敗戦を重ね9月25日に降伏、藩主南部利剛は領地を没収された。

※高直し：藩の格式を上げるため、年貢の基準となる石高を上げること。



『寛永盛岡城図』（もりおか歴史文化館 蔵）

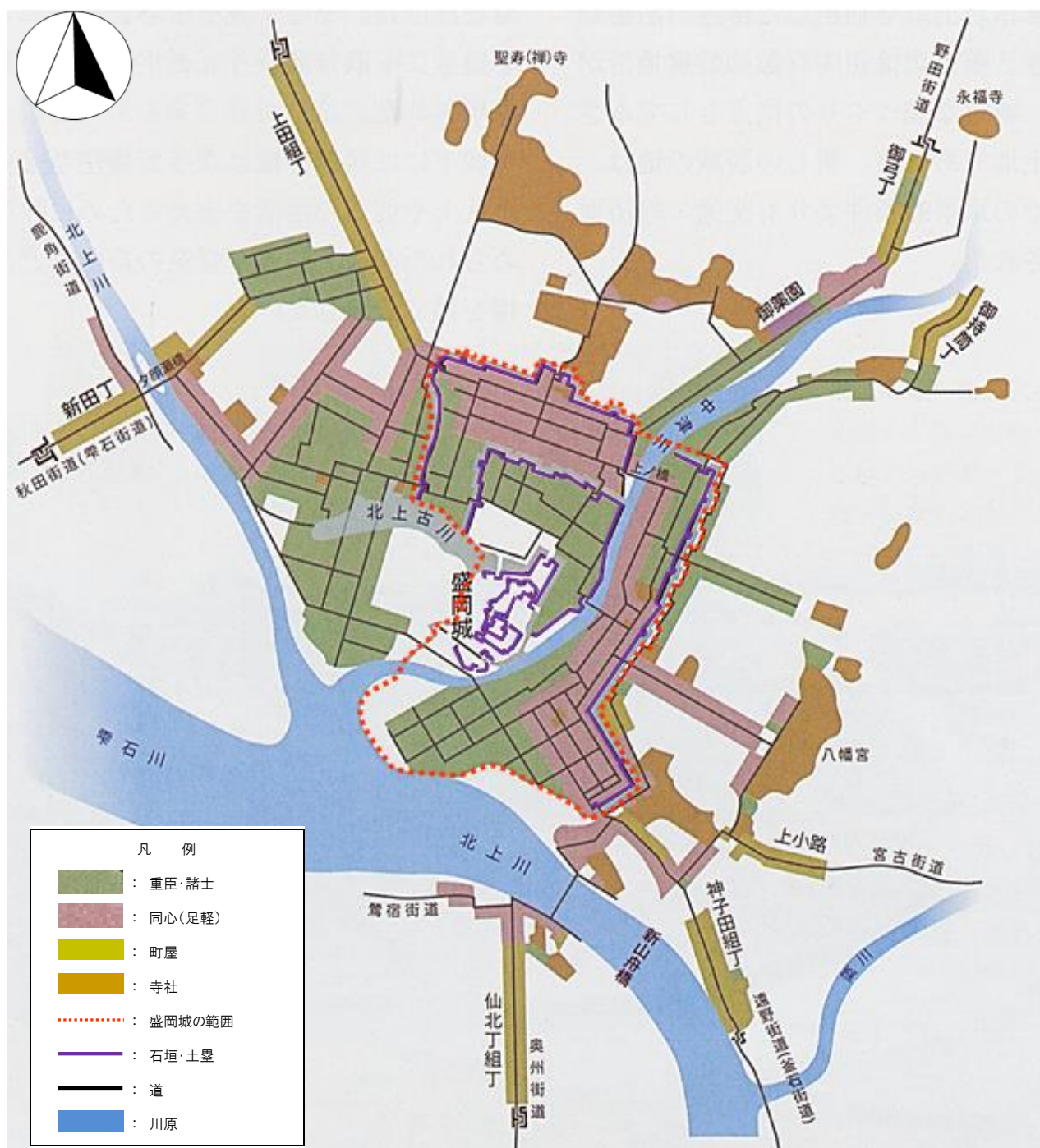
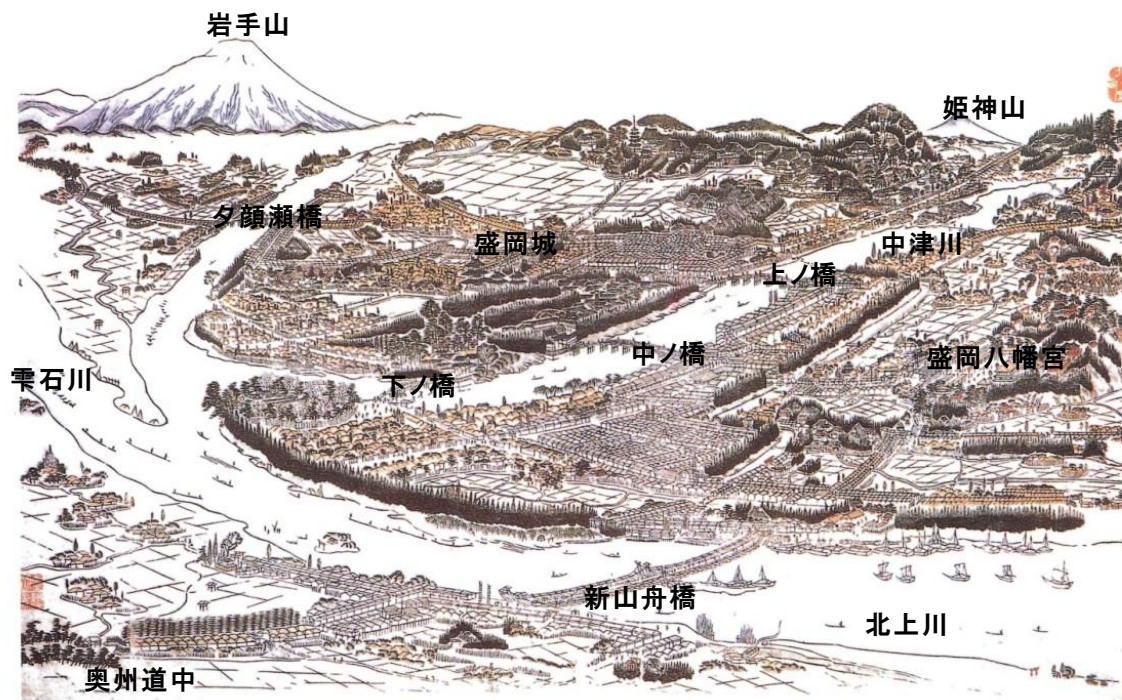


図 盛岡城の範囲と武士・町人の居住区域

『もりおか歴史文化館常設展示ガイド』から引用・一部編集



『盛岡城下古絵図』(川井鶴亭画) 安政年間(1854~1860)作

(もりおか歴史文化館 蔵)

(5) 近代

【盛岡市の誕生】

明治元年(1868)盛岡藩は、戊辰戦争に敗れ、9月に降伏した。その処罰として15代藩主南部利剛は隠居となり領地は没収された。後継者となった16代藩主南部利恭は、盛岡から白石13万石への転封を命じられ、藩士も屋敷・家財を手放して移住した。

これに対し、盛岡領内では旧藩主の復帰運動が起こり、翌年には70万両の献金を条件に盛岡に復帰することとなった。

明治2年(1869)7月、南部利恭が藩知事として盛岡に復帰すると古い統治制度を改めて市長・副市長を任命した。その後、明治3年(1870)7月南部利恭は藩知事を辞職、全国に先駆けて版籍を奉還し、盛岡県が誕生した。

明治4年(1871)、従来の城下町はもとの旧村に分割されることとなり、仁王村、志家村、東中野村、三ツ割村、加賀野村、新庄村、山岸村、上田村、仙北町村の9箇村に
むら ひがしなかのむら みつわりむら かがのむら しんじょうむら やまぎしむら うえだむら せんぼくちょうむら
 分属することとなった。

明治4年(1871)7月、廃藩置県が行われると、盛岡県は、新たに6郡を管轄することになり、明治5年(1872)1月に「岩手県」と改称された。

明治22年(1889)2月16日、岩手県の県庁所在地であった盛岡が、全国39都市の一つとして、同年4月1日をもって市制を施行することが示された。

産業の近代化は、日本が欧米に並ぶためにどうしても必要であった。明治政府も各府県も、農林鉱工業の近代化と共に新たな産業の導入・育成に力を入れた。

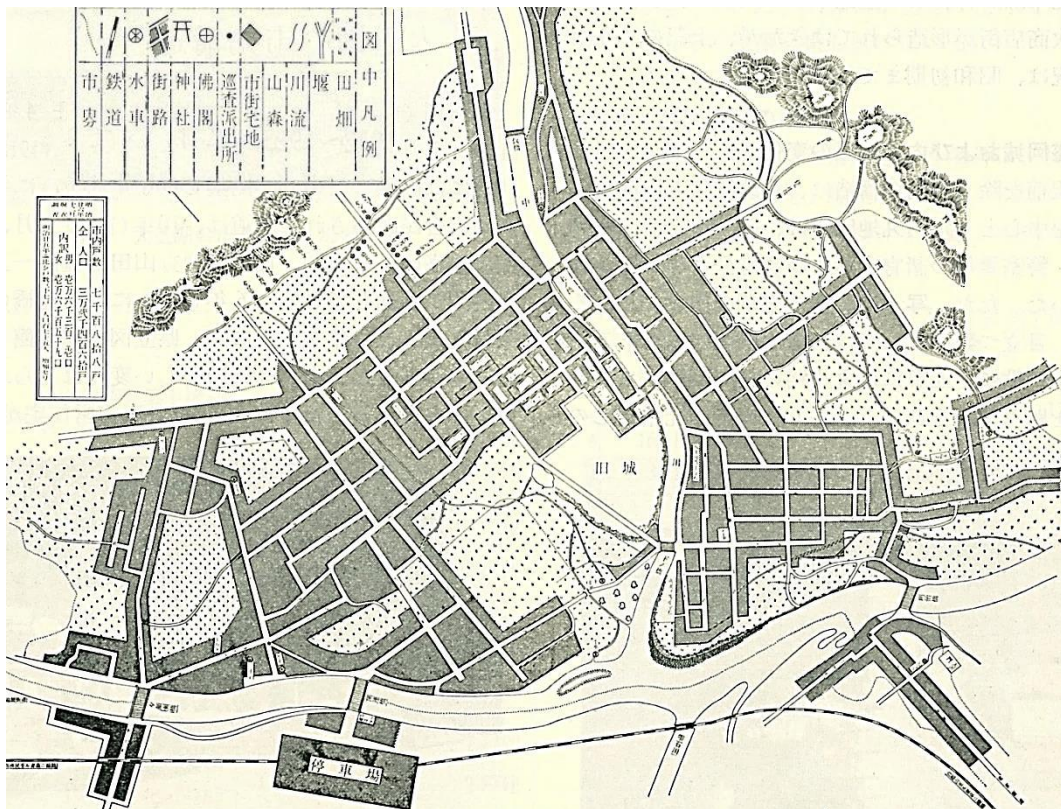


図 市制施行直後の市街図（改正盛岡市実地明細図 明治30年（1897））

『盛岡の歩み—市制施行80周年記念—』昭和45年（1970）から引用

岩手県では、初代県令^{しまいせい}の島惟精（在職：明治4年（1871）11月～明治17年（1884））は産業の育成のため、県直営の工業試験場^{かんぎょうば}（勸業場）と西欧式の大規模畜産農業を目指した牧場事業に取り組んだ。

勸業場は、明治7年（1874）盛岡の内丸に設置され、先進地から指導教師を招いて、養蚕、醸造、染色、鉄工などの技術の習得に当たらせ、多くの技術習得者が送り出された。

商業都市として発展途上にあった盛岡市では、産業振興に不可欠な資金を調達する必要性から、銀行を設立することが長年の懸案であった。

明治11年（1878）、旧盛岡藩士族らの手により^{だいきゅうじゅう}第九十銀行が設立され、明治29年（1896）には、盛岡市内の資産家たちの手により盛岡銀行が設立された。その後、明治31年（1898）に岩手県農工銀行、明治



岩手銀行旧本店本館

（重要文化財）

40年(1907)には岩手銀行(旧)が設立された。

明治17年(1884)に発生した^{かなん}河南大火の復興後、^{ごふくちよう}呉服町、^{こんやちよう}紺屋町界隈には各銀行・会社の威信をかけ、様々な洋風建築が建設された。明治39年(1906)には、呉服町に盛岡郵便局、明治43年(1910)には第九十銀行本店(現：もりおか啄木・賢治青春館)が、県内初の煉瓦造銀行建物として完成。明治44年(1911)紺屋町中ノ橋際に煉瓦造の盛岡銀行本店(現：岩手銀行赤レンガ館)、明治45年(1912)^{むいかちよう}六日町には東京に本店を持つ木造及び煉瓦造の^{きようえい}協栄銀行盛岡支店(現：東北総業社屋)、大正5年(1916)本町上ノ橋脇には煉瓦造の岩手県農工銀行、大正11年(1922)には鉄筋コンクリート造の旧岩手銀行本店、大正14年(1925)には^{やすだ}安田銀行盛岡支店が土蔵造から鉄筋コンクリート造石貼に改築された。

昭和2年(1927)には、鉄筋コンクリート造の盛岡貯蓄銀行(現：盛岡信用金庫本店)が建設され、盛岡市は近代的なまちなみへと変化していった。

盛岡市における電気事業は、日露戦争の始まった明治37年(1904)、盛岡^{こうわかい}交話会が中心となって、盛岡電気株式会社を紺屋町(現：東北電力株式会社岩手支店)に設立し、元盛岡市長であった^{きよおかひとし}清岡等を社長に選任した。盛岡電気株式会社は、翌明治38年(1905)9月12日、^{うづの}築川の宇津野発電所で発電を開始、市内の肴町、内丸、紺屋町などに電気を供給、岩手県初の電灯に明かりを灯した。

明治38年(1905)に終結した日露戦争後の軍備拡大に対し、全国各地で軍隊の誘致合戦が起こった。特に盛岡では戊辰戦争の際に幕府側につき、朝敵とされた歴史があったため、軍隊の誘致はその汚名を晴らす長年の悲願でもあった。

明治41年(1908)弘前の工兵第八大隊(後の工兵第八連隊)^{しもくりやがわ}が下厨川に移転、その3か月後には皇太子(後の大正天皇)を招いて特別演習が行われ、演習会場となった広大な草原を皇太子が「^{みたけがはら}観武ヶ原」と命名したと伝えられている。

翌明治42年(1909)、騎兵第三旅団が新設され盛岡に進駐すると、現在の青山^{れんべいじよう}みたけ地区に兵舎や練兵場が設置されることとなった。



旧宇津野発電所

(市指定文化財)



旧騎兵第三旅団通用門

【都市の近代化】

明治期末の盛岡市は、近代的なまちに変化しつつあった。明治7年（1874）に盛岡城の建物が取り壊されてから、石川啄木が「不來方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心」と詠んだように、盛岡城跡地は手入れをされることもなく荒れ果てていた。

明治36年（1903）、岩手県知事であった北条元利^{ほうじょうもととし}は、盛岡城跡を南部家より借用して公園整備を行う案を県議会に提出、明治39年（1906）3月に、南部家と押川則吉^{おしかわのりきち}知事の間で土地使用賃貸借契約（30年間無償）を結び、同年4月から凶作で困った人々への救済事業として、近代庭園の祖で造園設計家の長岡安平^{ながおかやすへい}の設計により公園整備に着手、同年9月15日に岩手公園として開園した。

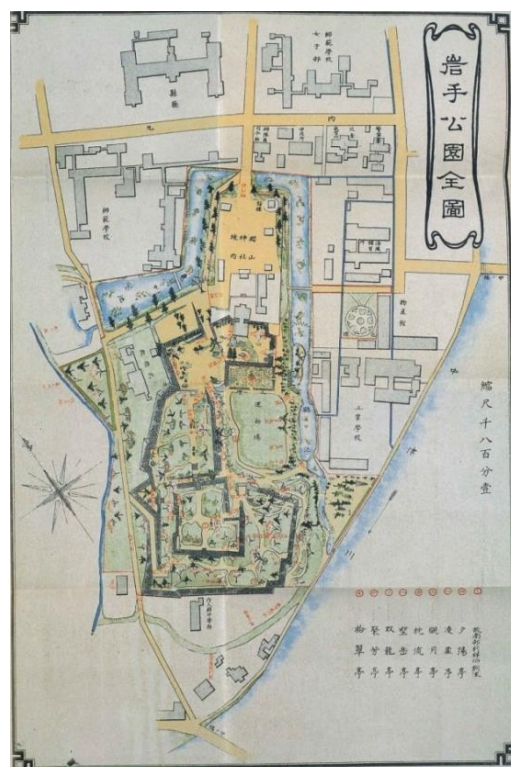
なお、長岡安平は、明治41年（1908）に竣工した南部氏別邸の庭園（国登録記念物、盛岡市中心公民館地内）や、明治44年（1911）完成の盛岡銀行庭園などを設計している。

一方、地元の有志が中心となって公園整備が進められた高松の池は、明治39年（1906）、日露戦争の戦勝を記念して、江戸時代に治水対策として作られた上田堤にサクラを植えようと

「栽桜会」^{さいおうかい}を結成、市民から寄附を集めてソメイヨシノの苗木千本を堤の周囲に植樹した。その後、地元・周辺住民の努力により大正10年（1921）頃にサクラは成木となり、春には満開の花を咲かせる盛岡の名所のひとつとなった。

なお、現在の名称「高松の池」は、当時の盛岡市長であった北田親氏^{きただちかうじ}が、かつて盛岡市長を務めた大矢馬太郎^{おおやまたろう}と相談して命名したものである。

明治43年（1910）9月、盛岡地方を襲った豪



岩手公園全図



高松の池



絵葉書『下ノ橋流失』

明治43年（1910）出版（もりおか歴史文化館蔵）

雨で、中津川、北上川が氾濫、上ノ橋、中ノ橋、明治橋^{めいじばし}などが次々に流失した。濁流はまちを飲み込み、約3,000戸の家屋が流失・浸水などの大被害となった。復旧には工兵隊が動員され、中ノ橋は明治45年(1912)に洋風の石組橋脚の永久橋に生まれ変わった。

明治44年(1911)には北田親氏市長により中津川の護岸工事が始まり、大正元年(1912)11月には中津川の東岸延長2,365メートル、西岸延長2,786メートルの区間で工事が完成。この約3年間の復旧工事を記念して、下ノ橋北たもとに中津川治水碑が建立された。



岩手県公会堂（国登録文化財）

こうして中津川流域は、宮澤賢治の詩「岩手公園」に描かれたように、花崗岩の護岸と川の流れ、鉄の欄干の中ノ橋、煉瓦造の銀行が並ぶ盛岡らしい景色を持つ地区となった。

大正時代になると、近代的な総合医療機関の設置も行われた。日本赤十字社岩手県支部病院は大正9年(1920)に大正天皇の即位記念行事として、内丸の盛岡中学校跡地に開設された。大正15年(1926)には、岩手病院(現：岩手医科大学附属病院の前身)本館が鉄筋コンクリート造で新築開院となっている。

また、昭和2年(1927)6月には、昭和天皇の御成婚を記念して建築工事が進められていた鉄筋コンクリート造の岩手県公会堂が完成した。昭和3年(1928)には昭和天皇を迎え、公会堂を大本営として演習が観武ヶ原^{みたけがはら}(現在のみたけ)を中心に繰り広げられた。

(6) 戦後の盛岡

【戦後の復興】

昭和20年(1945)8月15日、日本の無条件降伏により終戦を迎えた。それから1か月後の9月14日にはアメリカ軍が盛岡に進駐し、上田の盛岡工業専門学校(現：岩手大学工学部)がキャンプとして使用されることとなった。さらに、アメリカ軍は、岩手県に対してキャンプの将校や下士官以上で家族を呼び寄せている者のために宿舎の提供を要求。市内の民家や料亭、別荘などはアメリカ軍に使われることとなった。

終戦直後は、海外からの引揚者の収容や、農村部からの転入と併せて人口増加が著しかったため、深刻な住宅難となったが、海外からの引揚者・戦災者・復員軍人などを受け入れるため、青山町^{あおやま}の旧騎兵隊兵舎などを応急的に改造し、「青山寮」、「岩鷲寮」として開設。480世帯が収容された。

盛岡市の中心市街地の大半は空襲の被害を受けなかったが、盛岡駅前を中心とした地区が罹災したことから、昭和21年（1946）戦災都市に指定され、翌昭和22年（1957）～26年（1961）にかけて戦災復興土地区画整理事業が実施された。

【北東北の拠点都市を目指して】

盛岡市では、昭和30年代から市街地周辺の宅地開発が進み、昭和45年（1970）の第25回国民体育大会開催に伴い、スポーツ設備整備と共に、市内の道路整備が進んだ。

昭和50年代には、東北縦貫自動車道や東北新幹線の開業により、交通網が整備され、経済圏の拡大、生活圏の広域化が進んだ。

平成3年（1991）には、市街地南西部に新市街地を整備するため盛岡南地区開発が認められ、現在の都心部から盛岡駅西口地区を経て盛岡南地区へと連なる新しいまちづくりが進められることとなった。

この開発により、新たに住宅地が生み出されるとともに、大規模商業施設や郊外型の店舗等が立地するなど、新しい市街地形成が進み、多くの人々が往来するようになった。一方、中心市街地では、流入人口の減少により、店舗や事業所数の減少などが見られることから、中心市街地活性化の取組が進められている。

また、平成20年（2008）4月には中核市へと移行し、岩手県から民生や保健衛生、環境、都市計画などの行政分野における事務の移譲を受け、現在に至っている。

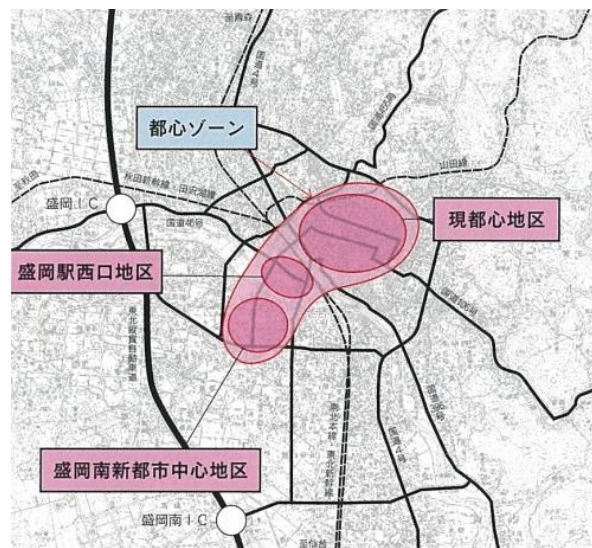


図 盛岡市における都心ゾーン

4 盛岡市の歴史・文化に関わる代表的な人物

(1) 藩政に関わる人物

ア 南部信直【天文15年(1546)～慶長4年(1599)】

三戸南部家の南部晴政の養子となり、天正10年(1582)家督を相続する。

天正15年(1587)には、加賀の前田利家を通じて豊臣秀吉に臣下の礼をとり、天正18年(1590)には小田原攻めに参加、南部七郡の領有を認められた。

天正19年(1591)、九戸政実が信直に対して反乱を起こすと、秀吉の援軍を得て鎮圧し、領内の一大勢力を排除した。

慶長2年(1597)頃から盛岡城の築城に着手、城下町の建設を進めた。



南部信直

(もりおか歴史文化館 蔵)

イ 南部利直【天正4年(1576)～寛永9年(1632)】

天正18年(1590)、小田原攻めの陣中において、前田利家を烏帽子親(※)として元服し、利直を名乗ったといわれている。文禄元年(1592)には、蒲生氏郷の養妹(又は養女)を正室と迎え、蒲生家さらに豊臣政権との絆を深めた。

慶長2年(1597)に始まる盛岡城の築城に当っては、総奉行として指揮を執り、城下町の形成に力を注いだ。



南部利直

(もりおか歴史文化館 蔵)

ウ 南部利剛【文政9年(1826)～明治29年(1896)】

嘉永2年(1849)第40代南部家当主となる。

利剛は、藩の教育振興に力を注いだことでも知られ、慶応元年(1865)、藩校明義堂を拡張して作人館と改称し、文学・武芸・医学3科の教育体制を整備した。また、洋学校日新堂を開設する際には、建材を提供し、さらに助成金を交付して援助した。

慶応4年(1868)に盛岡藩が戊辰戦争に敗れると、利剛は謹慎を命ぜられ、家督を嫡子利恭に譲り、明治29年(1896)11月2日、東京の地でこの世を去った。



南部利剛

※烏帽子親：元服の儀式の際に烏帽子をかぶせる役を務め、烏帽子名をつける仮の親。元服を前にした親から依頼されるもので、有力者に託されることが多い。

エ 南部利恭^{としゆき}【安政2年(1855)～明治36年(1903)】

安政2年(1855)10月9日、第40代南部家当主南部利剛の長男として盛岡で生まれた。

慶応4年(1868)12月、第41代南部家当主となり、盛岡から白石13万石への転封を命じられ、翌年には70万両献金を条件に盛岡に復帰した。しかし、藩の財政状況はどうにもならず、明治3年(1870)、諸藩に先立ち版籍を奉還した。

東京に移住後は英学校「共^き慣^{かん}義^ぎ塾^{じゅく}」を創設、旧盛岡藩士子弟の育成に努めた。



南部利恭

(2) 政治に関わる人物**ア 原敬^{はらたかし}【安政3年(1856)～大正10年(1921)】**

安政3年(1856)2月9日、岩手郡本宮村(本宮)にて盛岡藩士原直治^{はらなおはる}の次男として生まれた。

明治39年(1906)1月、第1次西園寺内閣で内務大臣兼鉄道院総裁となるまで、天津領事、農商務省大臣秘書官、外務省通商局局長、大阪毎日新聞社社長など多くの職を務めた。

大正7年(1918)9月29日に第19代内閣総理大臣となったが、大正10年(1921)11月4日東京駅構内で、原の政治姿勢に反対する19歳の青年に刺殺された。



原敬

イ 米内光政^{よないみつまさ}【明治13年(1880)～昭和23年(1948)】

明治13年(1880)3月2日、旧盛岡藩士米内受政の長男として三ッ割村に生まれた。

昭和12年(1937)、林内閣のもとで海軍大臣に就任、昭和15年(1940)には岩手県出身者として3人目となる内閣総理大臣に就任したが、陸軍の反対にあい半年後に退任した。

太平洋戦争末期には、小磯内閣のもとで副総理格として4期目の海軍大臣に就任した。



米内光政

(3) 産業・経済に関わる人物

ア 池野藤兵衛【明治4年(1871)～昭和37年(1962)】

明治4年(1871)8月24日、新穀町(南大通二丁目)にて7代目池野藤兵衛甚太郎じんたろうの長男として生まれた。

8代目藤兵衛は、大正3年(1914)、岩手銀行の取締役
に就任するなど、本県実業界の有力者で、大正14年(1925)
には盛岡商業会議所議員なども務めた。

また、当時水田であった盛岡市内の菜園の都市化を計画。
昭和2年(1927)に「南部土地株式会社」を設立し、盛岡
の近代化に貢献した。



池野藤兵衛(8代目)

イ 菊池金吾【文化9年(1812)～明治26年(1893)】

文化9年(1812)9月9日、稗貫郡亀ヶ森村(花巻市大
迫町)にて菊池弥兵衛やへえの三男として生まれた。

明治6年(1873)1月、県令島維精とともに地元の殖産
興業を図るため、中ノ橋際に機業場の開設を計画し、同年
12月に設置した。ここで盛岡藩士の子弟たちに機業技術を
習得させた。また、明治9年(1876)と明治14年(1881)
の明治天皇の東北御巡幸の際には、金吾の私邸あんざいしよが行在所と
なり天皇陛下が宿泊した。

この屋敷の庭園は「賜松園ししやうえん」と呼ばれ、現在はその一部
が杜陵老人福祉センターの庭園として残されている。



菊池金吾

ウ 金田一勝定【弘化5年(1848)～大正9年(1920)】

弘化5年(1848)2月12日、仁王村四ツ家町(本町通二
丁目)の豪商「大豆屋」金田一伊門いもんの長男として生まれた。

勝定は、明治29年(1896)創立の盛岡銀行をはじめ、
明治37年(1904)の盛岡初の電気会社である盛岡電気株
式会社、明治44年(1911)の岩手軽便鉄道など、多くの
企業の創立に尽力した盛岡屈指の実業家で、盛岡銀行頭取、
岩手軽便鉄道社長、盛岡電気株式会社社長等を歴任した。



金田一勝定

エ 瀬川安五郎【天保6年(1835)～明治44年(1911)】

天保6年(1835)7月27日、肴町にて両替屋を営む4代目油屋惣助あぶらやそうすけの子として生ま
れた。

明治9年(1876)10月、秋田県仙北郡荒川村(秋田県大仙市)の荒川鉦山の経営に乗り出したが、明治29年(1886)に三菱会社に売却した。その後、南昌荘(庭園が登録有形文化財・市保存建造物)を建てるなど、文化的な側面で活躍した。



瀬川安五郎

オ ^{かじませいいち}鹿島精一【明治8年(1875)～昭和22年(1947)】

明治8年(1875)7月1日、第一大区一小区上田村(上田)にて旧盛岡藩士葛西晴寧の長男として生まれた。

県立岩手中学校(現在の盛岡第一高等学校)卒業後に上京。東京帝国大学土木工学科を卒業後に、鹿島岩蔵の長女糸子と結婚し、婿養子となって鹿島姓を名乗り、明治45年(1912)には鹿島組3代目組長に就任。昭和5年(1930)には同社を株式会社に改め、株式会社鹿島組初代社長となった。



鹿島精一

(4) 学術・研究に関わる人物

ア ^{おおしまたかとう}大島高任【文政9年(1826)～明治34年(1901)】

文政9年(1826)5月11日、仁王小路で盛岡藩侍医の大島周意の長男として生まれた。

高任は、天保13年(1842)、17歳の時に上京し、江戸で蘭学を学んだ後、弘化3年(1846)には、さらに勉学に励むべく長崎に留学、西洋兵学、砲術、採鉱、精錬を学んだ。

高任は、盛岡藩領に豊富に産出していた磁鉄鉱に目をつけ、甲子村大橋(釜石市大橋)に日本初の洋式高炉を建設。安政4年(1857)12月1日、磁鉄鉱を使って製鉄を行った。

文久3年(1863)、八角高遠らとともに洋学校「日新堂」を建設し、理科系の教育を行った。



大島高任

イ ^{きん だいちきょうすけ}金田一京助【明治15年(1882)～昭和46年(1971)】

明治15年(1882)5月5日、仁王村四ッ家町(本町通)にて金田一久米之助の長男として生まれた。

東京帝国大学時代にアイヌ語に興味を持つようになり、後に北海道へ行き現地を調査し、アイヌ民族に伝わる叙事



金田一京助

詩ユーカーラの存在に注目。卒業後もアイヌの人々と交流しながら研究を続け、國學院大学教授、東京帝国大学教授を歴任し、埋もれていたアイヌ叙事詩の存在を明らかにした。

戦後には国語審議会委員として現代かなづかい制定に貢献し、昭和29年(1954)には文化勲章を受章した。

(5) 教育に関わる人物

ア ^{み た し ゅん じ ろ う}三田俊次郎【文久3年(1863)～昭和17年(1942)】

文久3年(1863)3月3日、^{かわらちやう}碓町(加賀野)にて盛岡藩士^{よし た か}三田義魏の次男として生まれた。

甲種岩手医学校卒業後、母校での勤務などを経て、東京帝国大学医学部選科で眼科学を学んだ。

帰郷した俊次郎は眼科を開業したが、明治30年(1897)、空いていた県立岩手病院の建物を借り受け、私立岩手病院を、明治34年(1901)には私立岩手医学校を創設。さらに、岩手育英会や盛岡実科高等女学校(現在の岩手女子高等女学校)、岩手医学専門学校(現在の岩手医科大学)を設立した。



三田俊次郎

イ ^{に と べ い な ぞ う}新渡戸稲造【文久2年(1862)～昭和8年(1933)】

文久2年(1862)8月8日、盛岡鷹匠小路(下ノ橋町)にて盛岡藩士^{じゅう じ ろ う}新渡戸十次郎の三男として生まれた。

札幌農学校在学中にキリスト教の洗礼を受け、卒業後にアメリカ、ドイツへ留学し農学や経済学などを学んだ。

帰国後札幌農学校教授となるが体調を崩し、カリフォルニア州で療養するが、その間に妻や恩師に問われていた日本の伝統的な道德教育についての考えを『武士道』としてまとめて出版。この本は、日本文化の紹介書として各国語に翻訳され、今も版を重ねている。



新渡戸稲造

後に京都帝国大学や東京帝国大学で教鞭をふるい、第一高等学校校長、東京女子大学学長などを歴任。国際連盟の設立時には、その深い学識と高潔な人格のため事務次長に推され、連盟の発展に寄与した。

(6) 芸術・文化に関わる人物

ア ^{ほう ち ゅ う ろ う}方長老(^{き はく げん ほう}規伯玄方)

天正15年(1587)筑前(福岡県)の^{むい な か た}宗像郡生まれ。

対馬藩と朝鮮との外交交渉を担当していたが、寛永10年(1633)、日朝外交にまつわ

る国書偽造事件が幕府の知るところとなり、寛永12年（1635）3月、盛岡藩に流罪となった。

方長老が、盛岡藩に流罪となった寛永12年（1635）から萬治元年（1658）までの23年間、法泉寺（北山）の庭園の作庭、アマドコロを原料とした「黄精飴^{おうせいあめ}」、みそ、醤油の醸造技術、清酒の醸造を教授するなどの足跡が伝えられている。

イ 葛西萬治【文久3年（1863）～昭和17年（1942）】

文久3年（1863）7月21日、上衆小路（下ノ橋町）にて盛岡藩士嶋澤舎^{かもさわとねり}の二男として生まれ、のちに岩手銀行頭取となる葛西重雄^{しげお}の養子となり葛西姓を名乗った。

明治36年（1903）8月、辰野とともに辰野葛西建築事務所を開設。当時、日本には建築事務所と言えるものはほとんどなく、大阪の辰野片岡事務所とともにその先駆けとなった。

同事務所が手掛けた建築は90件を超え、その中には、国指定重要文化財に指定されている岩手銀行旧本店本館や東京駅も含まれている。



葛西萬治

ウ 石川啄木【明治19年（1886）～明治45年（1912）】

明治19年（1886）2月20日、南岩手郡日戸村（日戸）にて常光寺^{じょうこうじ}の住職石川一禎^{いつてい}の長男として生まれた。

啄木は、学生時代から文学活動にいそしみ、金田一京助を紹介して与謝野鉄幹が主催した『明星』に親しんだのもこの頃であった。文学に志を立てた啄木は上京し、明治38年（1905）には詩集『あこがれ』を出版する。しかし、父一禎の住職罷免などにより、職を転々としながら盛岡、渋民、函館、小樽などに移り住んだ。

明治41年（1908）4月、再び上京、東京朝日新聞校正係をしながら、明治43年（1910）には初の歌集『一握の砂』が、亡くなる明治45年（1912）6月、『悲しき玩具』が刊行された。



石川啄木



宮澤賢治 坐像

（材木町）

エ 宮澤賢治【明治29年（1896）～昭和8年（1933）】

明治29年（1896）8月27日、稗貫郡里川口村（花巻市豊沢町）にて古着商を営む宮澤政次郎^{まさじろう}の長男として生まれた。

大正4年(1915)4月、盛岡高等農林学校(現在の岩手大学農学部)に入学。この頃から文学作品の創作に取り組むようになり、『ちゃんがちゃんがうまこ』や『岩手公園』など、盛岡の祭りや風景等を題材とした作品を残している。

卒業後は、日蓮宗団体の^{こくちゅうかい}国柱会での活動を経て、稗貫農学校(現在の花巻農業高等学校)教諭、東北砕石工場技師となった。

大正15年(1926)、農民指導を実践するために^{らすちじんきょうかい}羅須地人協会を設立。自身も農民として5年間ほど生活した。

賢治は、37年間の生涯で多くの短歌や詩、童話などの作品を遺しているが、生きている間に刊行された著作の一つである、童話集『注文の多い料理店』は、盛岡高等農林学校の後輩が営んでいた、盛岡市材木町の光源社から発刊されたものである。

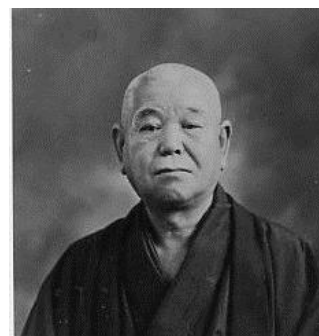
(7) 伝統工芸に関わる人物

ア ^{こいずみに ざえもん}小泉仁左衛門(8代目)【明治7年(1874)～昭和27年(1952)】

明治7年(1874)7月25日、志家村肴町(肴町)にて小泉^{とも}友弥の子として生まれた。

明治26年(1893)、アメリカのシカゴ市、大正14年(1925)パリで行われた万国博覧会において銅賞を受賞するなど、茶の湯釜や鉄瓶制作の技術が高く評価された。

仁左衛門は、南部鉄器製作者の技術向上のため、明治42年(1909)に「南部鉄瓶研究会」を結成、^{たかはしまんじ}高橋萬治や^{かなざわちよ}金澤千代吉ら多くの名工を排出した。昭和16年(1941)には、南部鉄瓶技術保存会理事長となり、製作技術保存に尽力した。



小泉仁左衛門(8代目)

イ ^{すずきもりひさ}鈴木盛久(13代目)【明治29年(1896)～昭和51年(1976)】

鈴木盛久(本名：^{ほんきち}繁吉)は、明治29年(1896)2月14日、生^{しょう}姜町(南大通一丁目)にて12代鈴木盛久の長男として生まれた。

昭和21年(1946)から日展に連続入選し、昭和27年(1952)の第8回展では岩手工芸界初の特選に選ばれた。一方、海外においても、昭和4年(1929)のベルギー・リュージュ万国博覧会美術部門で金賞を受賞。さらに、昭和34年(1959)、ベルギー・ブリュッセル万国博覧会でグランプリを受賞するなど国内外でその技術が認められ、昭和49年(1974)には「南部茶の湯釜南部鉄瓶」が文化庁から、「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」として選択され、その関係技芸者として認定された。



鈴木盛久(13代)

5 歴史的資産の概要

指定等文化財の分布状況

盛岡市には、地域固有の歴史・文化資源や自然資源などを対象とした数多くの文化財、天然記念物、及び埋蔵文化財包蔵地などが市域に広がっている。

平成30年4月13日現在、国の指定文化財が25件、登録文化財が12件、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財が2件、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財が1件、重要美術品4件が所在している。

また、地方指定の文化財のうち、岩手県指定文化財は64件、盛岡市指定文化財は181件となっている。

文化財指定総括表

(平成30年4月13日現在)

指定別 種別		国 指 定				岩手県指定		盛岡市指定		計	
		重要文化財		(重要美術品)		件数	点数	件数	点数	件数	点数
		件数	点数	件数	点数						
有形文化財	建造物	6	9			1	2	8	8	15	19
	絵画					1	3	10	27	11	30
	彫刻	1	1			2	9	35	574	38	584
	工芸品	5	6	3	20	32	55	23	60	63	141
	書跡			1	1			1	1	2	2
	古文書					3	279			3	279
	考古資料	4	951			3	12	3	56	10	1019
	歴史資料	1	1					8	64	9	65
	小計	17	968	4	21	42	360	88	790	151	2,139
無形文化財						1	1	1	1	2	2
民俗文化財	有形民俗文化財					7	65	28	194	35	259
	無形民俗文化財	1	1			3	6	40	49	44	53
記念物	史跡	2	2			9	14	11	13	22	29
	天然記念物	5	5			2	2	13	14	20	21
合計		25	976	4	21	64	448	181	1,061	274	2,503

注1(重要美術品)は、旧法により文部省から認定された美術品。

2 地域を定めないで指定している国指定特別天然記念物(ニホンカモシカ)、国指定天然記念物(イヌワシ等)は除く。

○記録選択

種別	件数	点数	計	
			件数	点数
記録作成等の措置を講ずべき無形文化財	1	1	1	1
記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	2	2	2	2

○登録文化財

種別	件数	点数	計	
			件数	点数
登録有形文化財(建造物)	10	10	10	10
登録記念物	2	2	2	2

(1) 国指定等文化財

盛岡市に所在する国指定等文化財の内訳は、巻末資料のとおりである。

建造物は、藩政時代の町家である旧中村家住宅や、明治期に建築された盛岡高等農林学校（岩手大学農学部の前身）の旧本館，岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館，旧第九十銀行本店本館などがある。

史跡は、陸奥国最北の古代城柵遺跡である志波城跡のほか、盛岡藩南部家の居城であった盛岡城跡。天然記念物については、盛岡地方裁判所の前庭にある盛岡石割ザクラのほか、盛岡で初めて確認された品種であるモリオカシダレザクラ，シダレカツラなどが指定されている。

考古資料は、繫遺跡出土の縄文時代中期の深鉢形土器（7個）のほか、萩内遺跡から出土した縄文時代後期の大型土偶頭部，手代森遺跡から出土した縄文時代晩期の土偶など、歴史資料は、明治12年（1879）に工部省赤羽工作分局で作成された工作機械である平削盤，無形民俗文化財は、江戸時代に起源をもつ永井の大念仏剣舞が指定されている。

ア 重要文化財

① 旧中村家住宅

中村家は、屋号を「糸屋」、又は店主の中村治郎兵衛にちなんで「糸治」と称し、呉服，古着のほか、盛岡藩特産の紫根染の布地を商う豪商であった。

建物は、文久元年（1861）頃に建築された主屋と、明治期に建築された土蔵により構成されており、主屋は木造2階建の切妻造で、屋根は柿葺，土蔵は2階建の瓦葺となっている。

主屋の建築面積は164平方メートル，土蔵は82.9平方メートルとなっている。

なお、この建物は新穀丁（南大通二丁目）に所在していたが、昭和48年（1973）に



盛岡石割ザクラ



大形土偶頭部（萩内遺跡出土）



永井の大念仏剣舞



旧中村家住宅

盛岡市中央公民館敷地内に移設された。

② 岩手銀行（旧盛岡銀行）旧本店本館

明治44年（1911）、盛岡銀行の本店として落成したもので、明治洋風建築界の雄、辰野金吾^{たつの きんご}と盛岡出身の葛西萬司^{かさいまんじ}によって設計された、いわゆる辰野式の建物である。

外壁は煉瓦タイル貼、屋根はスレート葺となっている。

内部は、営業室とロビーを吹き抜けとし、2階に回廊を廻らせ、付け柱や天井などを豪華なモチーフとしている。



岩手銀行旧本店本館

③ 旧第九十銀行本店本館

司法省技師であった盛岡出身の横浜 勉^{よこはまつとむ}の設計で、明治43年（1910）12月11日に完成した建物である。

構造的には、煉瓦組積造の外壁が独立しており、これに木造の横架材をもって上階床を支え、木造小屋組を外壁頂部に架ける造りとなっている。

なお、工事監督は久田喜一^{ひさだ きいち}、工事係新沼源之進^{にいぬまげんの しん}、石材、煉瓦共に盛岡近郊産、化粧タイルは東京産であったと当時の新聞は報じている。



旧第九十銀行本店本館

建坪 257.85 平方メートル、延床面積 515.70 平方メートルの2階建、同時に木造平屋附属建物 82.5 平方メートルが竣工しているが、現在これは3階となっている。屋根は当初はスレート葺であったが、昭和50年（1975）に現状の鉄板葺に改められた。

④ 岩手大学農学部（旧盛岡高等農林学校）旧本館

この建物は、明治45年（1912）5月に着工、同年（大正元年）12月に竣工した。工事の設計監理は、旧文部省の営繕組織の技手であった谷口 鼎^{たにくちかなめ}が担当しており、明治期に設置された国立の専門学校の中心施設のうち、現存する数少ない建物の一つとなっている。

旧本館は、正面 32.8 メートル、側面 14.6 メートルの木造2階建で、2階全体が講堂となっており、現在は岩手大学の農業教育資料館と



岩手大学農学部旧本館

して活用されている。

また、門番所は、明治35年（1902）の開校時に建築されたものと考えられているもので、正面が八角形、後方は方形の突出部（和室・事務室）が取り付く小規模な建物である。

イ 史跡

① 盛岡城跡（史跡）

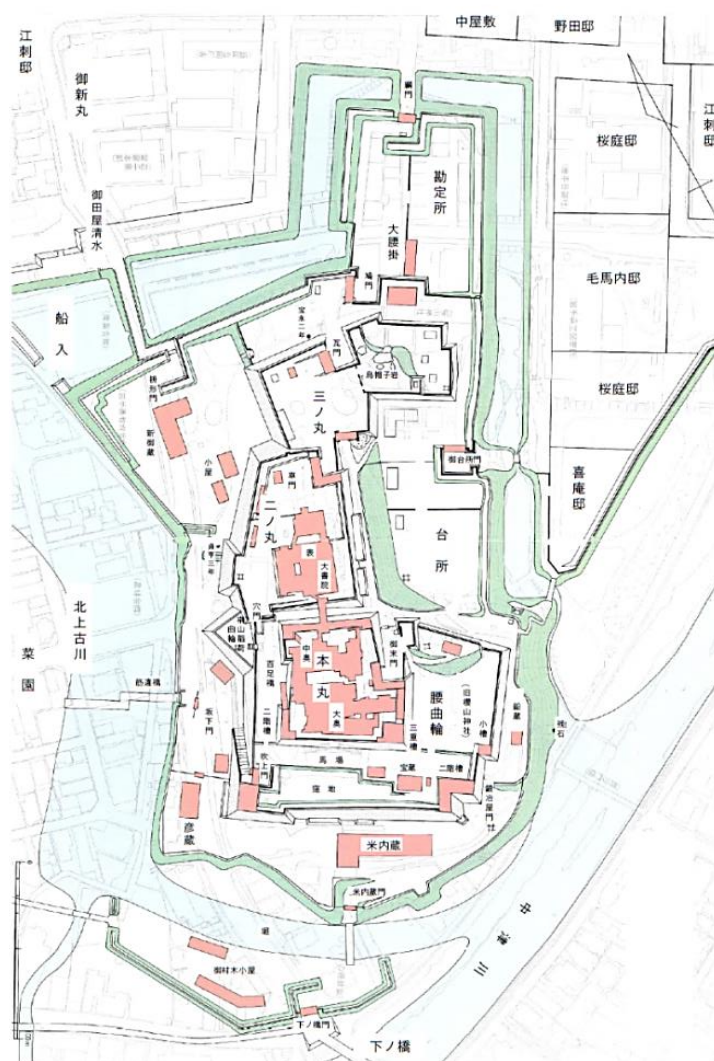
盛岡城は、天正19年（1591）の九戸合戦後、豊臣家の重臣浅野長政の勧めにより不来方の地に築城することが決定され、慶長2年（1597）又は慶長3年（1598）に築城工事に着手したとされている。

城は、北上川と中津川の合流点付近の丘陵を堀で囲み、本丸、二ノ丸、三ノ丸、腰曲輪こしくるわなどが設けられた内曲輪うちくるわ（御城内）を配置。さらに内曲輪の北側を囲むように水堀と土塁を巡らせて外曲輪そとくるわとし、南部氏一族や氏一族や藩の重臣たちの屋敷地が設けられており、全体規模は、東西約1,100メートル、南北約1,300メートルに及ぶ。

内曲輪は、本丸、二ノ丸、三ノ丸、腰曲輪こしくるわ、下曲輪しもくるわなどから構成され、丘陵南側の本丸から、二ノ丸・三ノ丸と段下がりになる連郭式れんかくしきの縄張りなわばりとなっており、豊臣期の大坂城の構造とよく似ている。

盛岡城は、東北地方北部では珍しい総石垣の城で、その石材は内曲輪のある丘陵や周辺にみられる花崗岩かこうがんを使用している。

明治7年（1874）3月に城内の建物は取り壊され、明治39年（1906）には長岡安平の手により岩手公園として整備され、昭和12年（1937）には、約84,092平方メートルが国の史跡指定を受けた。



盛岡城内曲輪の建物配置復元図（江戸時代後期）

『史跡盛岡城跡保存管理計画書』から引用

ウ 登録文化財

登録有形文化財は8件（建造物）、登録記念物（名勝）が2件所在している。

名勝は全て庭園で、明治期及び昭和初期に築造されたもので、旧南部氏別邸庭園、南昌荘庭園がある。

また、建築物としては、昭和初期に建築された岩手県公会堂、^{よない}米内浄水場緩速ろ過池及び水道記念館ほか6基、明治期に建築された旧南部家別邸があり、盛岡市における都市の近代化の歴史を知ることができる貴重な歴史資源と位置付けている。



米内浄水場（緩速ろ過池）

① ^{なんしやうしやう}南昌荘（建物は市保存建造物、庭園は国登録記念物・市保護庭園）

荒川鉦山（秋田県）の経営者、^{せがわやすごろう}瀬川安五郎が、明治17年（1884）の盛岡河南大火で^{えさしこうじ}餌差小路（肴町）の自宅を焼失し、翌明治18年（1885）頃から上衆小路（^{かみしゅう}清水町）に自宅として新築したのが後の南昌荘である。

明治43年（1910）、盛岡銀行（岩手銀行の前身）の^{きん だいちかつさだ}実質的な経営者だった金田一勝定が邸宅を入手。金田一は、2階大広間に隣接して、3間を増築するなど大幅に手を加えており、その姿が現在に残されている。

庭園は、護岸石組による池と周囲に巡らされた石敷きと飛び石を配した園路により周遊が可能で、建物の南に向かって広がる平場により東西に分かれている。

この平場には松が植栽されており、その南側には太鼓橋と藤棚が置かれ、池と松とが良好な景観を形成している。



南昌荘



南昌荘庭園

② 旧南部家別邸主屋・南部氏別邸庭園（別邸は国登録有形文化財、庭園は国登録記念物）

明治41年（1908）、旧盛岡藩主の南部家が別邸として建築した建物で、重要文化財の岩手銀行（旧盛岡銀行）本店本館などを手がけた^{かさいまんじ}葛西萬司が設計・



旧南部家別邸

監修している。

建築面積は453平方メートルで、建物は木造平屋建、寄棟造棧瓦葺で、正面中央に入母屋造の大玄関を構えており、旧大名家の別邸としての格式を今に伝えている。

建物に隣接する庭園（原設計：長岡安平）は、約10,000平方メートルあり、明治41年（1908）に作庭されたものである。

作庭当時の庭園は、戦後に北側約5分の1が失われたものの、作庭当初の様子が絵図や写真資料として保存されている。



庭園

③ 岩手県公会堂

岩手県公会堂は、皇太子であった昭和天皇の御成婚を記念して建設が計画され、東京都の日比谷公会堂を手がけ、都市美論の第一人者であった佐藤巧一により設計された。

建物は、大正14年（1925）9月の着工から昭和2年（1927）6月の竣工まで、約2年の工期と総額43万8,000円の建設費を投じて建設された。

幾度かの改修が行われたが、内部には漆喰の美しいレリーフや、優雅な曲線のバルコニーなど、創建当時の面影を伝えるアール・デコ様式の意匠が残されており、現在も大ホールや会議室を主体とした施設として市民・県民に利用されている。



岩手県公会堂

（昭和3年（1928）撮影）

盛岡市教育委員会所蔵

エ 記録選択・重要美術品

記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財が2件、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財が1件、重要美術品が4件が所在している。

このうち、記録選択を講ずべき無形の民俗文化財であるチャグチャグ馬コ（135頁参照）は、馬産地である岩手を象徴する行事として現在も継承されているものであり、岩手を代表する初夏の風物詩となっている。

また、重要美術品である上ノ橋の青銅疑宝珠^{ぎぼし}は、現在も橋の欄干に設置されているもので、城下町形成の歴史を身近に感じることのできる貴重な歴史遺産である。



青銅疑宝珠

① ^{かみの}上ノ橋^{はし}（^{ぎぼし}擬宝珠は国重要美術品）

中津川にかかる上ノ橋と中ノ橋の欄干につけられた青銅鑄物擬宝珠 36 個のうち、上ノ橋の 18 個がの重要美術品に認定されている。

なお、残りの擬宝珠は、中ノ橋が洋式架橋された大正元年（1912）11 月に下ノ橋に移されており、市の有形文化財に指定されている。

擬宝珠は、中津川の氾濫に伴い、しばしば落橋・流失を繰り返した。そのたびに不足した擬宝珠は鑄直して常に復元され、寛政年間には上ノ橋に 18 個、中ノ橋に 20 個の擬宝珠が付けられていたと伝えられている。

なお、現在の橋は、昭和 10 年（1935）に架け替えられたものである。



上ノ橋

(2) 県指定文化財

県指定文化財 64 件 448 点の内訳については、巻末資料のとおりで、建造物としては、藩政時代から続く老舗の^{きづやいけのとうべえ}木津屋池野藤兵衛家住宅がある。

歴史資料は、天正 18 年（1590）、豊臣秀吉による奥州仕置が実施された年の 7 月に宇都宮の大森で南部信直に交付された領地安堵の朱印状。盛岡藩家老の執務日誌である「^{もりおかはんざつしよ}盛岡藩雑書」は、寛永 21 年（正保元年 1644）から天保 11 年（1840）にわたる 197 年間の領内における農林業・漁業・鉱業・法制・民俗などのほか、藩政の中核における政治的事件や領民の日常生活までが記録されている。

また、7 世紀前半から中葉にかけて作られた^{うえだえ}上田蝦夷森古墳から出土した^{しょうかくつきかぶと}衝角付青や^{はじきかめ}土師器甕などは、蝦夷と呼ばれた人々の生活を知ることのできる資料として注目されている。

史跡は、縄文時代中期（約 5,000～4,000 年前）の大規模な集落遺跡である大館町遺跡のほか、奥州道中や^{おもと}小本街道、^{みやこ}宮古街道に設置された一里塚が指定されており、城下と主要な地域を結び、人や文物の往来を盛んにするため、街道の整備が行われたことを感じることができる。

天然記念物は、盛岡が江戸時代からカキツバタの多産地として知られていたことをしのぶことができる山岸のカキツバタ群落、希少な枝垂性を持つアカマツである玉山のシダレアカマツが指定されている。



大館町遺跡



上鹿妻念仏剣舞

有形文化財としては、平安時代後期に制作されたと考えられる東楽寺（城内）の木造十一面観音立像，南部家伝来の^{なまずおかぶと} 鯰尾兜や^{ぐそく} 具足類，^{きじおしゆうおたち} 雉子尾雌雄御太刀，^{だきゆうしやうぞく} 打毬装束などの工芸品，無形文化財としては日本刀製作技術が，民俗文化財としては，字の読めない民衆のために考案された南部^{えこよみ} 絵暦や，玉山地域の^{のらぎ} 野良着，上鹿妻の^{かみかつま} 念仏剣舞などが指定されている。

ア 有形文化財（建造物）

木津屋池野藤兵衛家住宅

この建物は、棟札によると天保5年（1834）に建築されたことがわかっており、松材を主に用いた土蔵造りの商家店舗兼住宅となっている。

この付近は、^{そうもん} 惣門といわれ、江戸時代は城下町の南の玄関口として、奥州道中（街道）沿いに代表的な商人が店を構え、蔵が建ち並び、活気のある地区であった。

この建物は、その当時の商家の面影を残す数少ない町家の一つであり、現在も会社の事務所として使用されている。

なお、住宅の建築面積は 238.52 平方メートル、延床面積は 363.94 平方メートル。土蔵（2階建て）の建築面積は 54.5 平方メートル、延床面積は 109.0 平方メートルとなっている。



木津屋池野藤兵衛家住宅

イ 史跡

上田一里塚（県指定文化財）

盛岡城下の鍛冶丁一里塚から渋民に向かい、奥州道中を北に約4キロメートル北上した地点に所在している。

この一里塚は、慶長15年（1610）に造られたとの記録があり、昭和初期までは、道路をはさんだ東西に2基が存在していた。

東側の1基は付近の市街化により消滅しているが、西側の塚は、上田修道院の敷地内であったことから、ほぼ円形に近い形で残されていたもので、現在の規模は、東西約10.5メートル、南北約11.5メートル、高さは約3.5メートルとなっている。



上田一里塚

(3) 市指定文化財

盛岡市指定文化財は、有形文化財 88 件（うち建造物 8 件）、無形文化財 1 件、有形民俗文化財 28 件、無形民俗文化財 42 件、記念物 24 件となっており、内訳は巻末資料のとおりである。

建造物としては、盛岡城内に存在した建物で唯一現存している彦御蔵、五百羅漢像が納められている報恩寺の羅漢堂、北上川舟運の起点であった新山河岸に所在する御蔵などといった藩政時代の建造物のほか、県内に現存する最古の発電施設である宇津野発電所、盛岡市を代表する先人である原敬の生家のほか、石川啄木に関連する旧渋民尋常小学校や旧斎藤家を指定している。

史跡は、蝦夷の首長の墓と考えられている高館古墳、平泉藤原氏との関連を想像できる経塚、鎌倉時代から戦国時代末期まで、紫波郡から岩手郡の一部を治めていた玉山氏の居城であった玉山館。江戸時代、盛岡城下の入口に位置する新山河岸と対岸の仙北町を結んでいた舟橋跡のほか、宮古街道や小本街道に設けられた一里塚などを指定している。

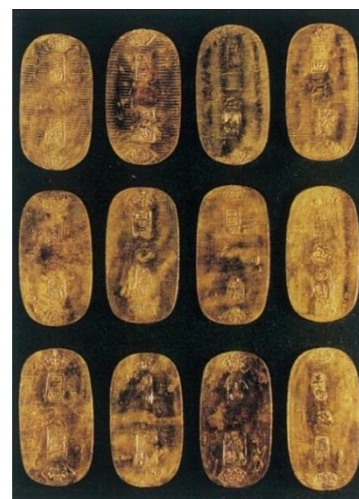
多くの民俗文化財のうち、有形民俗文化財については、盛岡藩3代藩主の南部重直墓所から出土した常滑焼大甕や慶長小判など、南部家にちなんだ文物、盛岡八幡宮の山車行事の際、各町内の標識として屋台につけられた丁印、県指定文化財（建造物）木津屋池野藤兵衛家住宅の火消用具など、江戸時代の生活文化を物語るもののほか、街道沿いに設けられた道標や供養塔等を指定している。

さらに、多くの無形民俗文化財は、地域毎に歴史と個性を持っており、江戸時代から続く盛岡八幡宮の山車行事、盛岡八幡宮の流鏝馬神事、裸参りのほか、各地域には、さんさ踊りや神楽、獅子踊り、念仏剣舞などが伝承されており、継承活動が盛んに行われている。

ア 有形文化財（建造物）

① 彦御蔵

江戸時代に「彦御蔵」と呼ばれた旧盛岡城の土蔵である。平成元年（1989）まで、現在地から西に100メートルの地点の市道「下ノ橋更の沢線」西側に存在していたが、同年（1989）3月、道路拡幅工事に伴い現在の位置へ曳家された。



南部重直墓所甕棺出土品

（上：甕棺・下：慶長小判）



玉山館



彦御蔵

建築年代は建物地下の発掘調査成果などから、江戸時代後期と考えられているもので、明和3年（1766）書上の岡城図に描かれているが、詳細な建築年代は不明である。

建物は土蔵造2階建てで、建築面積は180.25平方メートル、延床面積は360.5平方メートルである。

② 報恩寺の羅漢堂

報恩寺は、応永元年（1394）に三戸（青森県三戸郡）建立されたが、南部氏が盛岡に築城し、城下町を建設するに当たって、2代藩主南部利直の命により、三戸から現在地に移転したものである。

この羅漢堂は、享保20年（1735）に五百羅漢を納めるために建立された土蔵仕立の建物で、建物規模はほぼ50尺（16.6メートル）四方で、建築面積は約275.5平方メートルとなっている。

現在、屋根は瓦葺で堂内は石敷きとなっているが、創建当初は桧皮葺で、土間はたたきであったといわれている。



報恩寺の羅漢堂と五百羅漢像

③ 石川啄木新婚の家（旧帷子小路の武家屋敷跡）

帷子小路の名称は、貞享年間（17世紀末）に帷子多左衛門が町割をしたことに由来するもので、この地区には、50石内外の中下級武士が生活していた。

この建物は、明治38年（1905）6月4日から24日までの20日間、石川啄木が妻節子と居住した家で、江戸末期に建築された武家屋敷の一つである。

構造は、木造平屋建寄棟造で、建築面積は160.74平方メートルである。



石川啄木新婚の家

④ 原敬生家

原敬記念館に隣接して建つ、寄棟造茅葺の木造平屋建、一部2階建ての武家屋敷である。

この建物には、嘉永3年（1850）の棟札が残されており、原敬の祖父、原直記の代に建築がなされたものであることが窺える。

その後、明治7年（1874）頃、母屋の一部を残して減築。大正13年（1924）頃に、



原敬生家

玄関や応接間などを改築して現在に至っているもので、建築当初の規模の約5分の1（約176平方メートル）が現存しているものと考えられている。

⑤ 御蔵（おくら 景観重要建造物）

江戸時代後期に建築された建物と考えられており、安政3年（1856）にこの土蔵に一括して米などを備蓄するよう指示があったとの記録が残っている。

この建物は、土蔵造平屋建で、建築面積は330.0平方メートルとなっている。屋根は棧瓦葺で切妻となっており、外壁は土蔵の大壁式、しろしつくいぬり白漆喰塗となっている。

窓は外開きの土蔵式防火戸、鉄格子金網の開口部、窓上部に木製のひさし庇（鉄板包み）があり、腰は花崗岩による石積みで堅固に基礎が造られている。



御蔵

⑥ 下ノ橋（擬宝珠：市指定文化財）

下ノ橋は、慶長17年（1612）に完成。当初は擬宝珠が設置されていなかったが、明治43年（1910）の洪水後に中ノ橋が洋式の橋となることをきっかけに、大正元年（1912）に中ノ橋から擬宝珠を移設したもので、18個のうち「慶長14年上之橋」銘が9個、「慶長16年中之橋」が9個混在して取り付けられている。



下ノ橋

これは、江戸時代に洪水で何度も橋が壊れた際に、擬宝珠を回収したものの取り違えて取り付けられたためと考えられている。

なお、現在の橋は、明治44年（1911）に架け替えられ、現在に至っているものである。

(4) その他の指定制度による歴史遺産

ア 景観重要建造物

景観法第19条第1項（平成16年法律第110号）の規定に基づき、景観計画区域内の良好な景観の形成に重要な建造物として市長が指定するもので、24件を指定している。

① だいせんじ 大泉寺

大泉寺は、建保3年（1215）に、福岡（二戸市）に、けんねんぼう 顕念坊がせんりゅうあん 専立庵悟真寺を建立したことはじまり、九戸合戦の戦火により焼失したが、三戸に再建され大泉寺と改称さ

れたものである。

盛岡の地には、盛岡城の築城に合わせて移転してきたものであるが、元禄年間に火災に遭い焼失。現在の建物は文政年間に建築されたものと推定される。

なお、建物の延べ床面積は 304 平方メートルとなっている。



大泉寺

② 大慈寺山門

江戸時代初期に日本に伝来した黄檗宗おうぼくの寺院で、京都宇治の万福寺まんぷくじ、長崎の崇福寺そうふくじなどにみられるように、明、清の建築様式で伽藍が造営されている。

万福寺を本山とする大慈寺も山門をはじめ、本堂などがこの宗派特有の様式を基本にして建てられている。

江戸時代に立てられた大慈寺は、明治 17 年（1884）の大火により全焼したが、明治 37 年（1904）には原敬の援助により山門が建立された。

なお、原は本堂、庫裏の改築にも尽力し、大正 7 年（1918）に完成している。

その後、昭和 45 年（1970）に屋根の葺き替えや漆喰の塗り替え、土塀だった袖壁の築地壁ついでじかべに改修が施されている。



大慈寺山門

③ 莫産九（森九商店）

莫産九商店は、江戸時代後期の文化 13 年（1816）に創業した商家である。正式な店名は「森九商店」であるが、商品として莫産を取り扱っていたことから「莫産九」と呼ばれるようになった。

建物は、江戸時代から明治期にかけて建築されたもので、広い敷地に、店舗、住居、土蔵等、数棟が建っている。このうち、紺屋町の道路側に見えるのは、店舗と住居で、建築面積は 404 平方メートルである。

なお、店に残る記録によれば、天保年間（1831～1845）、明治初期には土蔵が、明治 19～20 年（1886～1887）には台所と離れ座敷、土蔵が、明治 45 年（1912）には敷地内で土蔵が移築されたことが記されている。



莫産九

④ 旧井弥商店

明治時代に建築された2階建土蔵造の建物で、現在は店舗事務所として使用されている。なお、昭和45年（1970）の火災により、屋根が修復されている。

屋根は棧瓦葺寄棟造、外観は土蔵、大壁式艶出し、黒漆喰仕上（一部白漆喰塗）窓には外開きの土蔵式防火戸、窓上部に木製庇を設け、腰壁は人造石研出し仕上げとし、軒は全て漆喰塗りとし、防火に配慮してある。

敷地内にある蔵は、江戸時代に建築されたもので、屋根は棧瓦葺、切妻造、外壁は土壁大壁で漆喰塗仕上げとなっている。窓鉄格子金網付き外開きの防火戸を設け、内側には片引き戸がある。基礎はコンクリートに改造。軒天、切妻破風は鉄板包で木部を現さず、防火構造となっている。

なお、店舗の建築面積は267.2平方メートル、蔵は267.2平方メートルとなっている。



旧井弥商店

⑤ 旧石井県令私邸

明治17年（1884）11月4日の大火により、仮官舎としていた新渡戸邸が全焼したため、同時に罹災した盛岡監獄の移転・新築に合わせて、囚人たちの手により、盛岡市内で生産された煉瓦を使って、明治19年（1886）に新築落成したものとされているが、建物落成に関連する記録は不詳で、昭和3年（1928）年に撮影・発行された絵葉書にその姿を確認できる。

建物は、建築面積が500平方メートルで、半地下階、1階、2階の煉瓦造3階建てで、屋根裏部屋が存在している。外壁は砂漆喰塗仕上げ、屋根はほぼ正方形の寄棟造棧瓦葺きとなっており、屋根に2箇所ドーマー窓のある比較的シンプルな洋風民家となっていたが、後世に改修されている。

1、2階は、ほぼ同じ間取りで原型を保っているが、現在使用されていない半地下階は、厨房その他使用人の部屋として使われていたと考えられている。

また、1階の洋風の浴室など、当時の日本人の生活習慣にない設計の建物であることから、外国人の設計による建物であるとも考えられる。



旧石井県令私邸



絵葉書『上空ヨリ観タル盛岡市街』部分（昭和3年（1928）撮影）もりおか歴史文化館 蔵

⑥ 旧宣教師館

アメリカ合衆国のフィラデルフィア市に本部のあったジャーマン・リフォームド・チャーチ教団の資金で、大正9年（1920）に、在住していた宣教師のために建築された建物で、延べ床面積は298平方メートルとなっている。

設計者、施工者は現時点で不明であるが、この種のキリスト教団関係の建物の通例や現存する建物の間取り、構造などの構成から、教団本部の計画指示による設計ではないかと思われる。施工は、未詳であるが地元の職人によるものと考えられている。

建物の主体構造は、煉瓦1.5枚積で、床、小屋組、窓廻りは木造を併用しており、建物妻側の煉瓦積棟は棟高まで達している。

後年、外装にモルタル吹付が施され、昭和36年（1961）に窓、屋根、暖房（ボイラーとスチームの取り替え）などが改装され、現在に至っている。



旧宣教師館

⑦ 徳清

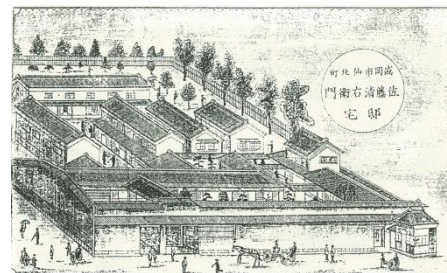
北上川の明治橋際の角に建つ瓦葺きの屋敷で、道路が敷地面より高いので道路からその規模、屋根の広さが見られる。

徳清の名は、江戸時代に徳田（現在の矢巾町）から盛岡に出て商売を始め、江戸時代後期には米穀世話方として活躍した、徳田屋清右衛門とくだ やせいう えもんにちなんで付けられた屋号である。

建物は、明治7年（1874）に解体された盛岡城跡の建物の部材を、明治12年（1879）に取得し、明治20年前後に建築されたものと伝えられており、明治17年（1884）の大火の経験から防火に強い土蔵造りとなっている。母屋は、木造平屋建で一部2階3階になっており、田の字型広間（接客空間）を中心に店舗部分と居住部分とに配分された平面形で、延床面積は669平方メートルとなっている。



徳清



明治期の徳清

『盛岡市實地明細図』（明治27年（1894）刊行）

⑧ 川鉄

明治28年（1895）から翌29年（1896）に建てられたと伝えられる木造2階建て真壁造しんかべの2棟からなる数奇屋風の建物である。

1,300 から 1,500 平方メートルあるという敷地の中にあって、建物は、三方をひと続きの大きな池と手入れの行き届いた多くの赤松を配した庭に囲まれている。

主屋は、もともと川魚料亭の客席として建てられたもので、1階には玄関、入口広間につづき1間幅廊下で囲まれた8畳間2室、2階には1間幅の廊下と床の間の付いた20畳ほどの大広間と6畳の小部屋などがあり、延べ約200平方メートル程の規模の建物である。

道路に接した付属棟は、料亭の厨房として使われていたもので、2棟合わせた延床面積は約330平方メートル程になるといわれている。



川鉄

⑨ 紺屋町番屋

明治24年(1891)盛岡消防よ組番屋として現在地に建てられた建物を、大正2年(1913)消防組第四部事務所として改築されたものが現在の建物といわれている。

建物の棟札によれば、「大正貳年七月^に中^{ちゅうかん}洗」とあり、当時の新聞記事、「大正2年7月18日起工上棟式を13時より行なった」との記述と符合している。

建物は、木造2階建てで、1階は元来消防器具の常置場が大半を占め、花崗岩の石畳となっているが、後にその一部を上がり座敷に改造し、街路二面に接する部分を消防車庫としていた。現状の外壁塗装色は、下見板部分が淡灰色で、建具と縁取りは肌色に塗り分けている。建坪約87平方メートル、床面積約159平方メートルとなっている。



紺屋町番屋

⑩ 旧盛岡貯蓄銀行

盛岡市出身の工学博士、葛西萬司の主宰した葛西建築事務所により設計された建物で、昭和3年(1928)12月17日に竣工した。

建物の主体構造は、鉄筋コンクリート造で、主要部は2階建て、一部に中2階、中3階の小室があり、

屋上階は鉄骨造で建物前面の重要な意匠を兼ねている。

建築面積は約540平方メートルで、延床面積は約1,038平方メートルである。



旧盛岡貯蓄銀行

⑪ きゅうおおいばばれんべいじょう 旧覆馬場練兵場

この建物は、悪天候等の時に屋内で兵馬の訓練をするために明治42年（1909）に建築されたもので、床面積は1,192.25平方メートルである。

構造は、壁体を袖壁で補強した煉瓦造で、切妻屋根を鉄骨小屋組で架構し、内部に柱がない大空間を造り出している。

覆馬場は、第23連隊、第24連隊それぞれに3棟ずつあり、かつては計6棟が建築されていた。

平成17年（2005）、盛岡市が保存のためにこの建築物を取得した時期には、3棟の覆馬場のほか、1階には兵士の購買・飲食を兼ね、2階には下士官クラブの入る兵舎一棟も残っていたが、当時の完全な形で残る建造物は、この一棟だけとなっている。



旧覆馬場練兵場

イ 保護庭園

保存建造物制度と同じく、盛岡の歴史とともに由緒・由来のある庭園を選定し、「保護庭園」として、現在7件の保護庭園を指定している。

① らうばいえん 老梅園（茶室は景観重要建造物）

盛岡市内の庭園のうちでは最も由緒のあるものといわれており、茶室である「老梅院」とともに、享保7年（1722）に造られたもので、聖寿寺の11世逸彦宗米いつげんそうまい禅師が「老梅園」と名付けたものとされている。

この庭園は、川の流れによって造られた地形を巧みに利用した自然風の庭園で、庭は建物の南西部に位置している。建物のある段丘面に続く部分が上段の庭で、その南西側の下の部分に池を作り、上段の庭の浅い池と水路をもってつなげている。

② いちのくら 一ノ倉邸

一ノ倉邸の庭園と建物は、明治後期に盛岡市出身の政治家であった阿部浩あべひろしによって造られたものである。

その後、一ノ倉氏に譲渡されたが、平成4年（1992）に市民からの保存要望を受け盛岡市が取得し、現在に至っている。



一ノ倉邸

この庭園は、明治35年（1902）から明治36年（1903）頃、東京から庭師を招いて作庭したものとされており、庭園の面積は6,500平方メートルとなっている。

この庭園と建物の四周は、濠と土堤で囲まれていた痕跡が残っており、庭園が造られ

た頃の雰囲気を持っている。

③ 賜松園 ししょうえん

この庭園は、敷地内に残っているエドヒガンの樹齢から、江戸時代中期頃に造られたものと考えられており、当初は武士の邸宅であったと考えられている。

明治元年（1868）からは明治初期に県内の殖産工業振興に尽力した菊池金吾が所有し、現在は、盛岡市立杜陵老人福祉センター敷地となっている。

「賜松園」という名の由来については、明治9年（1876）に明治天皇の行幸の折、菊池金吾邸が宿舎にあてられ、屋敷内の庭の松を「見馴れの松」と名付けられたが、明治17年（1884）11月に発生した大火でこの松が焼けたため、後に陛下から3本の松を賜ったことによるものである。



賜松園

（昭和3年（1928）撮影）盛岡市教育委員会所蔵

④ 小泉邸

この庭園は、実業家であり、盛岡市議議員や岩手県議会議員などを務めた小泉一郎（1903～1971）の邸宅内にあり、明治末期に地元の庭師である内田徳太郎により造られたものといわれている。

庭園の広さは約500平方メートルで、主庭と裏庭とからなり、建物の東側の部分で連絡している。

主庭・裏庭ともに小型の築山を持つ池泉回遊式庭園で、主庭の方は枯池となっているが、現在枯池となっている裏庭の池には水があった。

裏庭の築山は座敷からの観賞を主体とするため、石組が主体で回遊できるようになっているほか、せまい土地を巧みに利用して、自然風の味を出し、奥行きを感じさせる手法が取られている。

⑤ 下田邸 しもだ

この庭園は、江戸時代に造られたものとされているが、建築時期は不詳である。

下田氏は、明治11年（1878）の『士族明細帳』によると、下厨川村（所在地）に住していたことが確認されていることから、少なくとも明治期以前に造られたものと考えられる。

約4,700平方メートルの庭園内は自然林的林況となっており、リスの生息が見られるほどで、ケヤキ、カキ、クリ、モミジ、サワラ、イチイ、イチョウ、トチノキ、ホオノキ、キタゴヨウ、スギ、ハリギリ、チョウセンゴヨウ、ニセアカシヤ、クリ等が植えら

れている。

当初は、北から西にかけて流れを持つ池泉を持った回遊式庭園であったようで、池及び南西側の築山とその付近に散在する石により、当時の面影が偲ばれる。

ウ 景観地区

盛岡において、旧街道沿いに盛岡町家、酒蔵、寺院群といった多数の歴史的建造物が残っている大慈寺地区（南大通二丁目・三丁目、大慈寺町、なたやちよう みこだちよう ちやぼたけ鉦屋町、神子田町、茶畑二丁目地内）について、歴史的環境保全を目的とした景観法の規定による景観地区に指定し、建築物の形態意匠や高さに制限を加えるなど、盛岡ならではのまちなみを保存しようとするものである。



大慈寺地区



材木町裏石組

エ 保存建造物

盛岡では、歴史と伝統に育まれた歴史的環境と近代的都市機能とが調和する魅力あるまちづくりを目指し、「盛岡市自然環境及び歴史的環境保護条例」に基づいて、市内の由緒・由来のある建造物や都市景観上保全が必要な歴史的建造物を「保存建造物」として1件を指定している。

① 材木町裏石組

北上川ゆうがおせ夕顔瀬橋下流左岸の石垣（通称材木町裏の石組）は、全長361.2メートル（夕顔瀬橋から、えびすや戎屋履物店裏まで）あり、地盤からの高さ3.3メートルから5.5メートルとなっている。

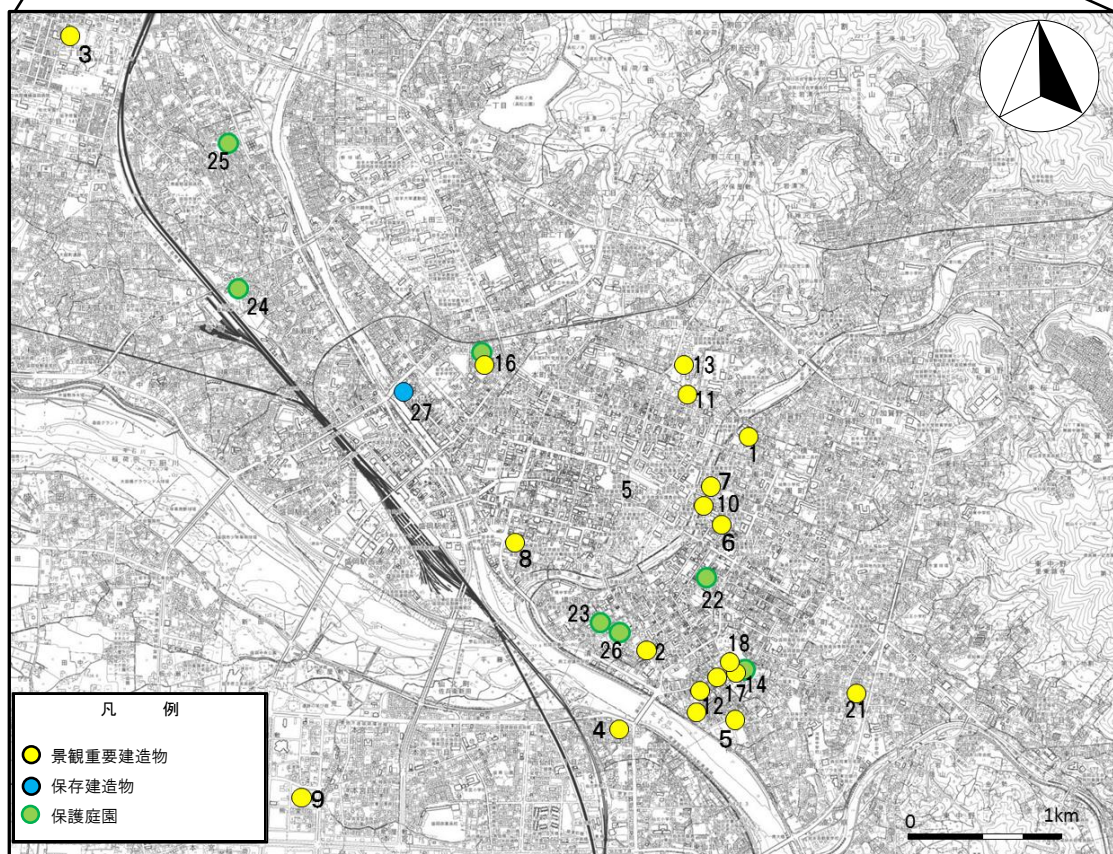
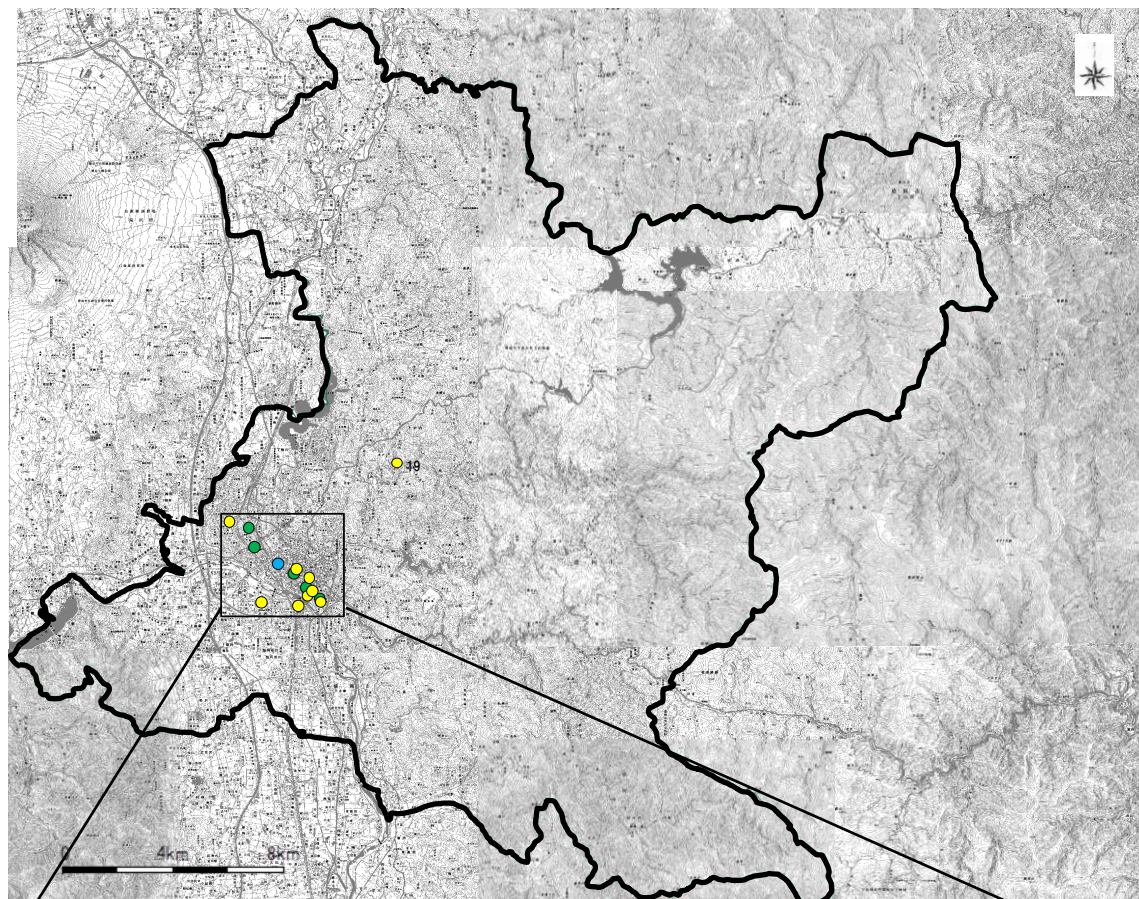
石垣の天端の高さは、一定しておらず、江戸末期から昭和初期にかけ、土地所有者がそれぞれ施工したらしいことを物語っている。

護岸工事の時期や内容についての記録は残されていないが、地域の方から聞き取ったところ、明治37～38年（1904～1905）に護岸の補修を行ったとのことであった。

なお、大正8年（1919）に発行された絵葉書には、岩手山や北上川にかかる夕顔瀬橋とともに、補修が完成した石組護岸が写っている。



絵葉書『北上川ヨリ岩手山ヲ望む』
（部分）※写真右側が石組（大正8年（1919）発行）もりおか歴史文化館 蔵



景観重要建造物・保護庭園・保存建造物の位置

○景観重要建造物

No.	名称
1	旧井弥商店
2	旧石井県令私邸
3	旧覆馬場練兵場 (盛岡ふれあい覆馬場プラザ)
4	徳清
5	浜藤の酒蔵
6	旧盛岡貯蓄銀行
7	紺屋町番屋
8	旧宣教師館
9	原敬生家
10	莫産九
11	大泉寺本堂
12	円光寺本堂
13	東顕寺本堂
14	老梅院茶室
15	明治橋際の御蔵

No.	名称
16	武田邸
17	川鉄
18	大慈寺山門
19	米内浄水場
20	南昌荘
21	塩重商店

○保存建造物

No.	名称
27	材木町裏石組

○保護庭園

No.	名称
22	賜松園
14	老梅園
16	武田邸
23	小泉邸
24	下田邸
25	一ノ倉邸
26	南昌荘

(4) 関連文化財群（盛岡市歴史文化基本構想）

盛岡市歴史文化基本構想は、市内各地域にあるさまざまな文化財を、指定の有無や類型の違いに関わらず、文化財相互の関連や文化財の周辺環境も含めて総合的に把握し、保存・活用するための基本構想である。文化財を保存し有効活用しながら、地域の魅力を増進させていくため、地域の歴史的経過や特性を明らかにし、一定の方針のもと、長期的な視野で、計画的に保存・活用していくことを目的として策定されたもので、文化財をひとつのまとまりとして認識し、価値の顕在化を図るため、9箇所の関連文化財群を設定している。

なお、関連文化財群については以下のとおりであるが、詳細については「盛岡市歴史文化基本構想」を参照されたい。

- ①大館町遺跡と縄文文化—旺盛なる縄文の息吹—
- ②志波城と古代の村—北の蝦夷たちと国家—
- ③安倍氏から藤原氏—岩手・斯波の平泉文化—
- ④中世の城館と領主—乱世を駆け抜けた武将たち—
- ⑤盛岡城と城下町—南部盛岡のお城と城下町—
- ⑥県都盛岡の発展—啄木・賢治が見た盛岡とその後の発展—
- ⑦商家と街道筋の暮らし—大慈寺地区周辺—
- ⑧農業の発達と農村文化
- ⑨山里の景観と信仰・生活—玉山地域—
- ⑩山里の景観と信仰・生活—大ヶ生地域—

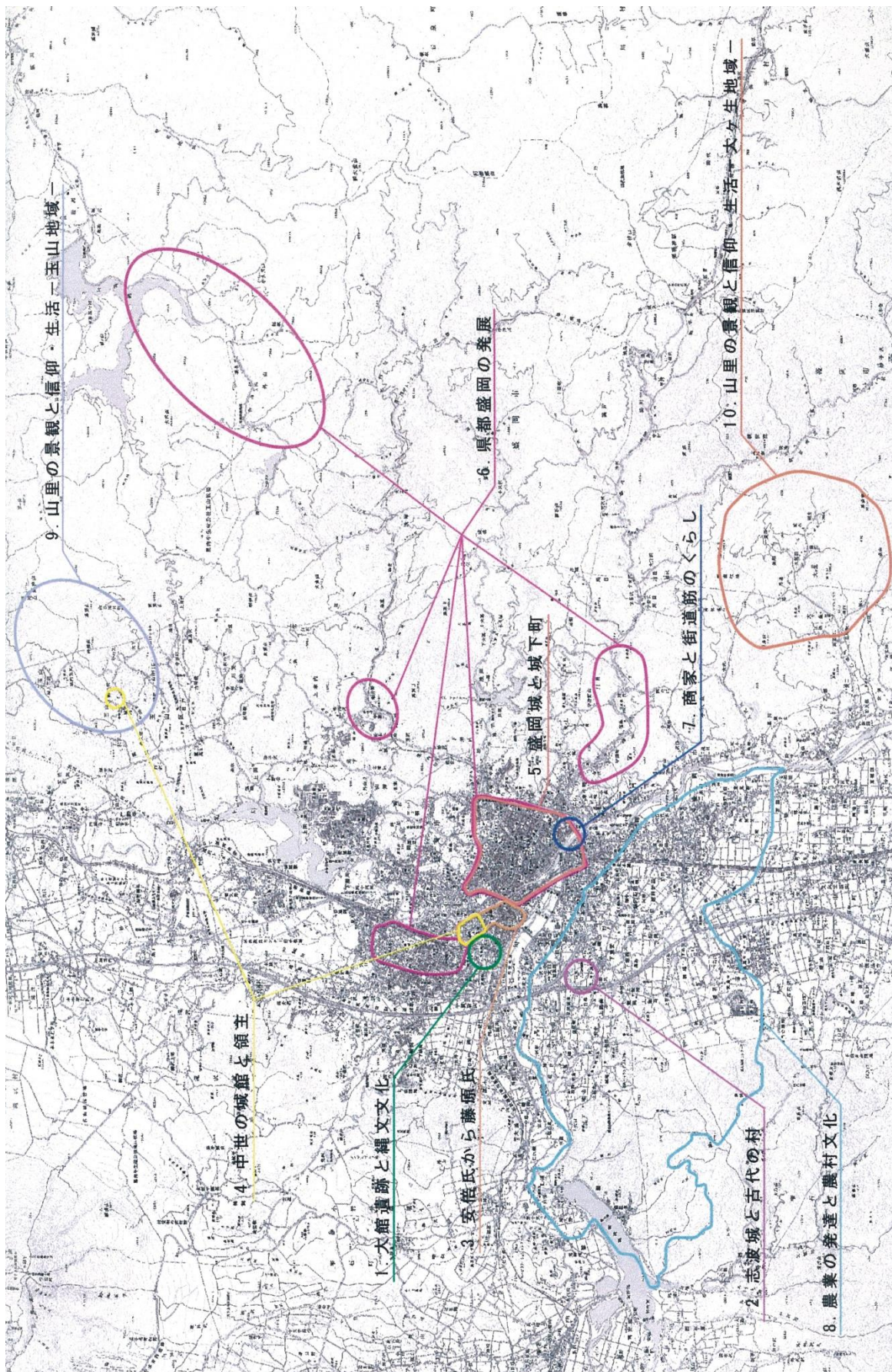


図 盛岡市の関連文化財群

6 盛岡市の特産品

盛岡市では、古い絵図にも描かれているとおり、周辺の丘陵地から流れ込む小河川や伏流水が水脈となっている清水（湧水）が多いことから、良質な地下水を利用した酒造業や豆腐のほか、そばや団子、せんべい等が古くから製造、販売されている。

ア わんこそば

昔から、岩手では、客に「そば」を振る舞う風習があり、宴の席で一度に大勢の客にゆでたてのそばを提供するため、少量ずつお椀に盛り付けて出したことがわんこそばの起源とされ、盛岡市出身の原敬も「そばはわんこに限る」といって愛したといわれている。

さまざまな薬味とともにそばを味わうことができるとともに、給仕さんの「それもう一杯」「はい、じゃんじゃん」などの掛け声とともに、客の持つお椀に小分けにしたそばを容赦なく放り込んでいくといったやり取りも楽しむことができる。



わんこそば

イ 盛岡冷麺^{れいめん}

昭和29年（1954）に朝鮮半島の平壤出身者が本場の味に改良を加えて作ったのが最初で、現在は市内に数多くの盛岡冷麺店がある。

小麦粉とでんぷんによる強いコシと透き通った麺が特徴で、スープは牛骨・鶏肉などを煮込んで味付けしている。

キムチの量で辛さを調節でき、ゆで卵やキュウリ、季節の果物などが盛り付けられていることで多彩な味になる。



盛岡冷麺

ウ 盛岡じゃじゃ麺

盛岡じゃじゃ麺は、戦時中に中国東北部で食べた味をもとにアレンジされたもので、うどんに香ばしい肉炒め味噌、刻んだキュウリとネギを乗せ、好みでおろししょうがや酢、ニンニク、ラー油を加えて食べる。

食べ終わったら、といた生卵に、ゆで汁と肉味噌を加え、卵スープの「ちーたんたん」で仕上げるのが常連客の常識となっている。



盛岡じゃじゃ麺

エ 南部せんべい

南部せんべいは、かつては、ひえ・あわ・そばなどの雑穀をひいた粉を原料に作られ、非常食や携行食として、凶作が多かったこの地域の人々の命をつなぐ大切な食べ物であった。

南部せんべいの起源は、楠木正成くすの きまさしげの子孫が八戸地方に渡り、せんべいを焼き始めたいたという説と、長慶天皇ちょうけいが戦乱を逃れて陸奥国を訪れた際、赤松助左衛門あかまつすけざえもんという者がそば粉を練り丸い形に焼いて、献上したことから始まったという説がある。

主原料が小麦粉に変わったのは、明治時代以降で、ごまやピーナツが入ったものが主流であるが、最近では盛岡冷麺の材料が入ったものも作られている。



南部せんべい

オ 盛岡りんご

盛岡市は、本州で最初にリンゴの栽培を始めた「リンゴ先進地」で、一日の寒暖の差が大きいことから糖度が高く（15～16パーセント）、味が良いリンゴが収穫されていることで知られている。

現在、世界で一番生産されている「ふじ」の原木は、昭和36年（1961）に青森県藤崎町ふじさきから下厨川字鍋屋敷しもくりやがわあざなべやしきの果樹研究所に移され、大切に育てられている。

研究所では、甘みと酸味のバランスが良い、赤い夏リンゴ「さんさ」や、糖度が17パーセントを超え、濃厚な食味の「はるか」など、盛岡市生まれ、盛岡市育ちの品種も生産されている。



盛岡りんご

カ 地酒

盛岡市は、きれいな伏流水や地下水が豊富で、周辺で良質の米が収穫されるほか、「寒造り」に適した気候風土であることから、古くから酒造りが行われており、その実力は全国新酒鑑評会でも高い評価を受けている。

また、酒造りの責任者である「南部杜氏とじ」は、蔵元のどんな要望にも応えられる器用さを兼ね備えていると全国的に高く評価されており、日本各地に招かれて酒造りを行っている。



盛岡の地酒

キ しょうゆだんご・お茶餅

盛岡市では、うるち米を熱湯でこね、丸めて蒸した後に、生醤油と片栗粉で作った醤油だれをまんべんなくからめ、串に刺す「しょうゆだんご」や、米の粉、そば粉などをこね、うちわ状にのして串に刺した餅に、クルミ醤油をつけて焼く「お茶餅」が古くから作られていた。

これら団子の製法は、盛岡市ならではのものです。市内には、だんごを製造・販売する店舗が数多く存在する。

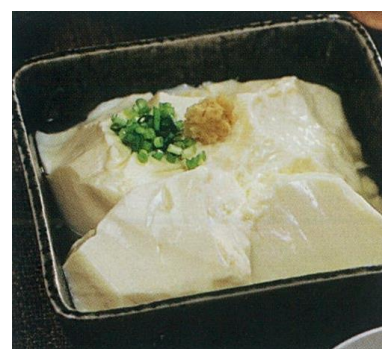


しょうゆだんご・お茶餅

ク 豆腐

盛岡市は、全国でも有数の豆腐消費都市で、総務省統計局が実施している家計調査で、購入額が毎年上位を占めている。

盛岡市では、古くから「南部白目」や「スズカリ」という大豆を使って豆腐が生産されており、特に「よせ豆腐」は、濃い豆乳を使い、そのまま固めるため、滑らかさと大豆本来のうまみを楽しむことができる一品である。



よせ豆腐

ケ 南部鉄器

南部鉄器は、盛岡藩主が京都から釜師を招き、茶の湯釜を作らせたのが始まりといわれ、砂鉄や鑄物砂、木炭などに恵まれた環境であったことから発展したもので、鉄瓶や湯釜などを中心に生産されていたが、現在は、すき焼き鍋やダッチオーブンなどの調理器具のほか、風鈴やブックエンド、灰皿、置物などといった嗜好品も製造・販売されている。



南部鉄器

南部鉄瓶を製造する際には、鉄を真っ赤になるまで焼くことで製品に膜が形成され、さびを発生しにくくする「金気止め」が行われているが、この技術のおかげで鉄瓶で沸かしたお湯には鉄イオンが溶け込み、鉄分を普段の生活で摂取できるようになっている。

コ 南部桐たんす

岩手は、桐の産地で、箆笥や下駄が生産されていた。

南部桐は、伸縮性に富み、湿気を呼ばず機密性も高く、火事からも衣服を守るため、女子が生まれると桐を植え、嫁入りするときにその木で箆笥を作るものとされていた。



南部桐たんす

サ 南部しぼり，紫根染^{しこんぞめ}・茜染^{あかねぞめ}

紫根染は，ムラサキ草の根を原材料とした染物で，岩手県北部から青森県南東部の一帯には古くから良質のムラサキが自生していたためその縁は深く，古くは鎌倉時代（14世紀初頭）には「岩手根紫」として古文書に登場している。

紫根の産地である盛岡藩では，その染色技法も独特の発達を遂げ，南部紫根染は，藩の献上品であった。

型をつけた布を一針一針縫い取っていく絞りは，縫うだけで半年～1年を要し，完成まで5年かかるといわれている。



南部紫根染・茜染

シ 南部古代型染^{こだいかたぞめ}

江戸時代に武士たちが衣類などに用いていた図柄の型紙を復刻した染物である。

南部家の家紋である向かい鶴をはじめ，牡丹，千羽千鳥^{せんぼちどり}などの型紙を彫り，布の上に防染糊を置いて染め抜くという伝統的な手法で作られている。

代々伝わる型紙は，300種類以上で，現代でも格調高い風合いと伝統美を感じることができる。



南部古代型染